
ダンジョンコンビニ デッドライン 魔王城《ラスタン》店によるこそ！

上屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョンコンビニ ハッドライン 魔王城店ラスダンによろしく！

【著者名】

Z5743U

【作者略】

上屋

【あらすじ】

広大に広がる魔王城地下ダンジョン、そこには一軒のコンビニが、今日も元気に営業している。

「やあやあ、よくぞ来店くださいましたお客様！ コンビニハン
ーストアのハッドライン、魔王城店ラストダンジョンへ！」

当店では日用雑貨から、お弁当、ドリンク、スイーツ、毒物、トラップ用建材など豊富な品揃えでいつでもお客様のお役に立てるよう日々努力しております！

ちゅうとしたことでも氣になさらずお声かけ下さい。我が店の従業員がお客様のために全力で解決いたします。

コンビニトックドライバー！ コンビニトックドライバーをどうかよろしく

お願ひします！

……あ、店員に喧嘩売るのだけは止めて下せこネ？ 物を売るのはウチの方の専門ですか？」

「店長お、何やつてんすか？ 手が足りないんで早くレジやって下れこよー。」

「ああ、ジム君ちゅうと待つて下せー。」

深夜の口算（前書き）

ほんせんやと、書こうといつと黙こもる。

深夜の日常

黒一色、夜の彩を映す窓には俺の顔が映っていた。

ふち無しのメガネ、目元を隠すまで伸びたボサボサ気味の黒髪、特徴の無い若者の顔、それもとびきりの退屈に漫りきつた表情だ。反転して映る「ジム・スマス」の名札の心なしかくたびれて見える。無理もない。夜勤、深夜のコンビニのバイトなんぞこんなもんだ。時給に釣られて来てみれば、ずいぶんと立地に面食らつたが、慣れてみればどうということは無い。

魔王城、俗に言われるラストダンジョン内といつても馴染んでしまえばこんなもの。

深夜の店内では四人ほどの客がいるのみ。さつきから四時間くらい入り浸っている完璧に時間潰しにきた馴染みの客だ。

ん？ あれは……

ペローン

「あ、いらっしゃあせえ」

来客用のブザーに体が反応、俺はもはや反射動作になつた挨拶を力無く告げた。

「…………」

まるで財布でも落としたかのような仮頂面のまま、見慣れた客がづかづかと店を歩く。見た目は二十代半ばほどの年齢。輝きを放つ紫の長髪と高い身長、黒い隈取りが映える目元、朴念仁と笑われる俺でも最初見た時は思わず黙ってしまったほどのシャープかつダー

クな雰囲気を纏う美しい女性だ。冷たい眼から放たれる視線は鋭角な殺氣を放つ。

全身にはやたら有機的なラインを描く尖ったデザインの紫色の鎧をまとっていた。なにか夜中にかたかた動きそうでいやなデザイン。肩からは固まる寸前の血のようなクリムゾンレッドのマントが風もないのに緩やかに揺れている。

客の歩みは入ってからすぐに右へ曲がった。俺のいるレジの反対側、雑誌コーナーへ向かっていく。づかづかと、そりゃあもうづかづかと。

……あー、またかよ。

そしてそこでヤングジャンプを立ち読み というか袋閉じを歪めて斜めから見ようとしている 一人組の内の一人のすぐそばへ進んでいく。

目標の一人、中肉中背の若い男は豪奢な鎧を纏っていた。背に背負うは神々しい大剣。いわゆる広場とかに刺さつてそうな礼のヅンな感じ。

袋閉じを斜め見しようとするその眼は、冷徹で、残酷で、何よりも必死だった。恐らいかなる強敵を相手にした時も、この男はこんな眼はしていないだろう。

あいつ、きっと本気で人殺す時はあんな眼をするんだろうなあ。そんなにみたいのか表紙の見出しの『女僧侶の秘密の惱殺タツ』

「 おいッ！ なにやつてんだよー！」

「おうふツー！」

入ってきた紫髪の美女 というか魔王 が、命掛けの形相で袋閉じを盗み見しようとしていた一十代の男 このアレなのが勇者 に怒号を飛ばす。驚きでビクリと身を震わせる勇者。めちゃ

くちゃキヨドつてる。これが人類の希望かと思つと人類滅んでもいいかなと思えてきた。

「なにお前、ラストダンジョンで「コンビ」行つてへる」つて！？
勇者業舐めてんの！？」

額に青筋を立てて怒鳴り出す魔王。ちょっと涙眼なのは、かなり待たされたからなんだろうか。

「しようがなじだろ！ キョウヤンジャンとチャンピオンの発売日だつたんだから！」

もはや言い訳どころか大人としてアレなレベルの腐れ言を吐き始める勇者。つうか驚いた時に袋閉じが少し破けている。後で買い取らせよう。死なないかなコイツ。

「ラストバトルの途中でコンビニによるわ、オマケに四時間以上帰らないわ、お前ら勇者やる気あんの！？ 無いなら帰つていいんだよ！ 待たしてると配下のモンスターの時給ももつたいいんだから！」

いや結局帰すのかよ。ていうか配下のモンスターは時給制だったのか。

「色々あるんだよ、回復剤切れたし、小腹すいたし、MP無いし」

そこはラスダン前なんだから備えとけ。といつか覚悟しとけよ。

「やっぱ勇者業舐めてんだろう前！ 大体……、あ、ちょっと、おい！ 店員！ 店員！」

長髪をなびかせ、魔王が振り返る。端正な顔に渋い表情を浮かべながら、俺を手招きして呼び寄せた。この人大人しく振る舞えばただの美人なんだけどなあ。

「はあ、なんすか？」

仕方無く近くへよっていく。なんかまためんじくさそうだな。

「さつきステータス確認したら、コイツらMP回復してるじゃないか!? MP回復剤は販売禁止つてこの店出す時の条件で決まつてたはずだぞ！」

あー、そういうえば出店の際は魔王側と色々契約条件を付けたって店長がいってたつけ。

「ああ、MP回復剤は禁止ですけど、ヒールスポットは契約に入つてないんで、有料のやつがあるんですよ」

一瞬、魔王の顔が呆ける。この人見た目はスバルタンなのにどこか又けてんだよなあ。

「はあッ!? そんな抜け道あつたのか!?」

「ええ、店長がそれはOKだつていつてました。まあ俺はバイトなんによくわかんないんですけど」

「店長だ！ 店長呼んでこい！ 私は断固抗議するぞ！」

バタバタと手を振りながら取り乱す。涙眼がより強まつた。少しは落ち着け最高責任者。

「店長は転職神殿と業務提携の相談をするために、一週間ほど出張中です」

「……転職神殿？ 何の業務提携だ？」

「なんでも新職業『コンビニ店員』を造るそ�で。一応習熟度のクラス名が『暗黒のブラック店員』とか『絶望の廃棄弁当処理係り』とか『愛と悲しみの誤発注』とかまでは決まつてゐらうですが」

「……お前んとこの店長はいつたこどりを田指してゐんだ？」

知るか、俺が聞きたい。

「とにかく！ 条件の変更だ！ ヒールスポートも禁止にするぞ！」

腰に手を当て、胸を張り宣言をする魔王。鎧越しでも豊満な胸の形がわかる。少しば威儀を出しながらじつといふようだ。

「たしか条件の改正は一年」と、あと一年は無理ですね

「ああー もうー。」

苛立つた声を上げ、頭を抱えてイヤイヤと振り出す。この人行動が一々子供っぽいよ。

「ふはははー、自業自得だな魔王！ それもこれもコンビニのHロ雑誌にヒモをかけるという非道な行いの報いだ！」

急に元気になる勇者、コイツほんと死はないかなあ。全体攻撃使

えないまま大量のスライムに削り殺されればいいのに。

「勇者さん、今雑誌の影に隠したヤンジャン、袋閉じ部分が破れましたから買取お願いします」

「え、いやあの、『めんなさい』買い取ります」

最初から読まずに買えよ。

「うちの配下のモンスターは未成年もいるんだ、そんな雑誌ヒモ縛りなしで売れるわけないだろ。こないだって新入りのモンスターに『魔王様、あの縛つてある本は何の本なんですか？ 内容教えて下さい』と聞かれて答えるのきつかったんだぞ」

頬を赤らめる魔王。いや、魔王さん、それ質問ぽいただのセクハラだから。

「中身を調べなかつたら立ち読み……じゃない、買つかどうか判断つかないだろ！ 中身さえ見えれば、はつ、そうか！ おい！ 盗賊！」

勇者の呼びかけにカップラーメンのコーナーからひょろ長い人影が歩いてきた。

「何だ？ 僕は今新発売のチョコサワークリームきしめんと梅ジャム焼きそばのどっちにするか熟考中なんだが」

皮鎧の瘦身の男 カップラーメンマニアの盗賊 が口を開いた。それ試食したけどどちらもハズレだぞ。

「トレジャー・サーチを！」の本に使つんだ！ そして内容を教えるー。」

トレジャー・サーチ、盗賊のスキルで宝箱など、密閉物の中身を探る能力だ。このアホ勇者、小学生辺りが五分で思いつくが、それでもなお踏みとどまる」とを平氣でやりやがる。そこにシビれず憧れず、武器買つたけど装備忘れたとか最高にアホな理由で死ねばいいの！」。

「仕方ないな、……任せろ」

身構えた。やるつもつらしげ。コイツもアホか。

「これをお頼む！」

勇者の出した本は「団地妻僧侶、屋下がりのお祈り」お前どんだけ僧侶好きなんだよ。

「ぬうんツツー……、こ、これはー！」

「ツツー、どうした盗賊ー！」

蒼白な顔で尋ねる勇者。お前戦闘中仲間がやられそうでもそんな顔しないだろ？

「なんていひた！ 勇者、この本は……スゴくエロい」

「なん……だと……？　じゃ、じゃあ」この工口本は！？」

今度勇者がだした本は「女僧侶が信仰ぶん投げる時」……なんで「うちのノンビニは女僧侶の本が充実してるんだ？」ひょっとして僧職系女子が今ブームなのか？

「ぬうんツツ……」これは、凄まじく工口本！

「な、なんだつてえツツ！　せ、せめて内容を教えてくれ！」

「言葉を出来ないほど……工口本！」

バカだ。ミドリムシのほうが英知と教養溢れる種族に見えるほどバカだ！」「うう。

「あの、お客様。今、夜遅いですし、他のお客様の迷惑になりますから静かにしてください」

俺の隣では、魔王さんがダン引き＆ウジ虫を見る眼で一人を観察していた。意外と潔癖だな魔王さん。

「あ、いえ、すいません」

「あ、ごめんなさい」

一瞬で素に戻る一人、深夜のテンションの力なんてこんなもんだ。お前ら基本地味な人間なんだからそれらしくしてろよ。

「ああ、店員さん、ちょっとといいかな?」

低い声が聞こえた。勇者の隣で黙つて立ち読みをしていた重厚な鎧に顔まで包まれた斧を担ぐ巨漢 戦士だ。が口を開いたのだ。つうか立ち読みしてた本が「ラスダン近くの宿屋主人が教える財テク必勝術」……戦士でも税金対策とかすんのか?

「『ラガラガ ベギラマたん』第十刊と『プリティー神官ペドフィーの毎日』第三刊はここには入荷していないのかな?」

……えーとその題名のマンガはたしか。

「すいません、うちじゃ入荷してない……」

「おい、そのマンガはほんの少しだけ魔王国内ではおいてないぞ」

俺の言葉を遮つて魔王さんが喋る。あ、ひょっとしてこいつもりですか?」

「魔王城に余りに公許良俗に反する全年齢向けロリペドマンガだから、規制してくれと市民から苦情があつてな。試しに我が輩も読んでみたが、噂に違わぬヘンタイぶりだったので速攻で『魔王条例禁止図書』に登録した。いい年した大人があんなものを読むなど恥をしれ恥を!」

ああ、言っちゃったよこの人、いや魔王。たしかに話聞いて読んでみたら俺も引くらいだつたけどさ。しばしの沈黙ののち、戦士が口を開いた。

「……己が信条を貫き通し生きる」とこ後悔は無い。……口リ
ペドは、恥ではない、生き様だ」

いや恥だよ全力で恥だよ。せめて隠そつよ、だれにも見えないよ
うにじよつよ。

「なつ！ 痴れ者ガ！ 一体お前ら勇者一味は何を考えて……」

「なー、そんなことじよけビよつ

セリヒドン引かずる魔王わんに勇者が口を挟んだ。

「魔王だつてこないだキワドイ内容のBLUREトイロ!!立ち読みして
たじやん」

それ俺も見たことあるわ。

「……ていッ！」

魔王さんのチョップが勇者の顔に炸裂、ペチリと音を立てた。魔王さんはすでに耳まで真っ赤だった。

「コンビニ内では豊富な魔力や体力を誇る魔族の強盗や乱闘防止のため、攻撃魔法完全無効化、物理攻撃力99.9%OFFの結界がかかっている。そのため例え魔族の王たる魔王でも、店内で振るえる暴力はあるへなちょこチョップしかない。

……こんな結界仕掛けるとかいつたいの店長は何もんだよ？

「誰が！」

ペチリ、と勇者の額が音を立てて叩かれる。

「 ブーレトイ ハハイー 」

ペチリ、と勇者の鼻がちょっと歪んだ。

「 ドライな商人のヘタレ受けを読んだってえー? 」

いや完璧読んでんだろ魔王さん。 内容知ってるし。

「 ちよつとおーー! 店員さんいのーー 」

「 あ、はあーー! 今行きまーす! 」

レジから高い女性の声が聞こえる。ペチペチとチョップ合戦を繰り広げる魔王さんと勇者をほおつて、レジへ戻るとするか。

「だからわあー、ないのアレ? 」

「 申し訳ないんですけどないんですよ」

レジの前で、年齢は二十代ほど、杖を携え、赤いローブと特徴的な幅広の尖り帽子をかぶった気怠げな女性 魔術師だ が眉根を寄せていた。それなりにかわいいんだからそういう表情はないほうがないんじゃない?

「だからさあー、チヨーンソーウィーの？ 最近流行りから欲しいんだけど」

「いやうひの店は条件で武器は取り扱えないんですよ
ねえよ。コンビニが扱うわけねえだろ。うつかその流行りはちよ
つと遅れてるよ。

「いやうひの店は条件で武器は取り扱えないんですよ

「武器じゃないわよ。日曜大工の工具よ。大体さあー、この店だつ
て強盗用の自衛武器あるんでしょ？ それを棚にあげて……」

「武器はありますよ。自衛の道具はこの常に後ろに置いてあるモ
ップだけですよ」

少なくとも、俺がシフトでいるうひは武器などいらない。

「……わからそモップやたら輝いてて氣になるんだけど何製
？」

俺の後ろでは金属製モップの柄が鈍く輝いてる。

「はあ、店長の話ではレアメタルのオリハルコン製っていうてしま
たよ。せめてもの自衛になればと店長が造らしたそうですが」

魔術師の顔がヒクついた。

「純オリハルコン製ならうちのアホ勇者の剣より上の武装じゃない
！ あなたの所の店長は何もんなのよー」

知るか、あの妖怪の正体など知りたくない。

「前々から思つてたけど」のパンペーって変よ、立地もアレだけどいつ来てもスイーツのティラミスとかショーキーラムとか売り切れんのはなんですよ?」

「この店出す時の条件で、ティラミスとショーキーラムは注文できる限界まで全部魔王さんに献上つてことになつてるんですよ」

またも魔術師の顔がヒクつく。杖を折りそつなほど握りしめている。雑誌コーナーで未だはたきあつていてる勇者と魔王さんを睨む。

「立場思いつきり利用してゐるわねえ、あのアマ……」

「城のマックはお菓子作れないし、もうトカゲステーキとか食べたくないってかなり喜んでるんですけどねえ。ただそろそろ他のお客様さんからティラミスを食いたいって苦情が……」

巨漢のオーラや強面のオーガから「スイーツを喰わせろ」と詰め寄られる経験はもう一度としたくない。

ピローン

「あ、こりつしゃ……」

ぬつとした影、のそりとした歩行。一瞬、言葉に詰まる。魔術師がそそくさと店の奥へ逃げていく。

「おい、今はあの娘はいねえのか?」

見上げるほど上の上背、太い通り越し丸い体、黒々とした体毛に、

申し訳程度の「ウモリの羽。牙の皿立つ」ウモテの顔のサイドには、捻れたヤギの角がついていた。

「お客さん、今は深夜、あの娘のシフトは僕ですよ。第一、酒に酔つて入店は止めてくださいませんか？」

精一杯の作り笑顔。出来うる限りの愛想を振りまきながら、お暇を願うが、……多分いつことかねえだらうな。酔つるし。

このクソお客 ド腐れグレーターーデーモンという種族の「ゴミオヤジ」は昼間働いているバイトの娘 半魔族の十六才 になにかとちよつかいだして店長から出禁喰らった口クデナシの客だ。この魔族の国じや昔は人間の血が入った半魔族は被差別種族だったそうで、最もあの魔王さんがついでからは差別は全撤廃路線になつたそしだが 大体のお客さんはまったく気にしないんだが、たまにこのド阿呆みたくいじりだすやつがいるらしい。

大方、店長が出張と聞きつけて酒の勢いできたのだらう。……店長のヤロウ、出禁にすんならしつかり脅し入れとけよ。

「あ”あッ？ いないんなら呼んでこいや、俺は客だぞ！」

「勘弁してくださ」とお客さん。今は深夜ですよ

ゲフリと息を吐くオッサン、クソ、やっぱり酒くせえ。

「おい、なんでこの店は酒置いてねえんだ！？」

「魔王さんの条件で酒類は置かないと決まってるんですよ」

「だったらお前が買つていい！俺は客だ……」

「何をやつとるか」のバカ者がツツ……」

かん高い怒声、空気が激しく振動する。霸気を漲らせた美貌の魔王が立っていた。魔王さんがオッサンを一括したのだ。しかし、

「ああつ！？ どうやつて魔王継いだかも怪しいヤツが何いつてやがる。オレに指図すんじゃねえっ！」

レジ横の商品をぶちまけ、かまわず怒鳴り出すオッサン。こいつ酒の勢いでわけわかなくなってるな。

魔王さんがなんか近くでわたわたしてるが、結界で攻撃能力が弱められても体重は変わらないので、今の魔王さんの腕力ではこの質量だけは巨大なオッサンを店外へ排除は出来ないのだろう。……役たたねえ、最高責任者。

「大体この店は前から気にくわねえんだ！ 店長は不気味だし、この野郎は愛想ねえし！」

店長が不気味なのは同意だ。俺の場合愛想を最大限売つてこれだ。しそうがねえだろ。

「あの半魔族のチビ娘だつて、マジメぶつても裏じや客でも取つてんじやねえのか！？」

……オイツ

「オイ、あんちゃん、あんたも案外あの娘の客だつたり……」

「勇者さん、入り口のドア全開にしてもいいませんか？」

オッサンの真後ろ、出入り口から少しそり逃げようとする勇者に声をかける。……」「ほんと『勇者』か？

「あ、ああ、わかった店員さん…」

勇者が出入り口の両扉を全開にしたのを確認。ドアの外にはダンジョンの闇が広がっていた。

「お姉さん……」

「あつ?...」

オッサンの前に立ち、遠田の視線。真っ直ぐに出入り口とオッサンが重なるのを確認、足を広げ腰を静かに落とす。

「店長や店とか俺の悪口は別にいいんですけど

ゆうくじと息を吐き、呼吸を整える。丹田から上の「氣」を脳内でイメージ、丹念に静かに「氣」を練り上げていく。氣を練ることと放つこと、このイメージをどれだけできるかが俺の持つ技術の背骨だ。そつと、緩く握った右拳をオッサンの腹の前、三センチほど離して置く。オッサンの推定体重は一百キロほど。ナマった俺でもまだイケるはず。

「従業員、特に女の子の子の下品な悪口は止めてもいいませんか、この

× × × × 野郎」

毎回だつたら言えない最高峰の罵倒。言つた俺さえ口を思わずや
すぐたくレベル。もちろん、

「 ツ「の、テメエツ！」

「の単細胞に効果はバツグンだ。

「セイツ！！」

飛びかかるオッサンへ、氣合とともに踏み込み。大地を蹴り、
練り上げた氣を拳から爆発させるイメージを解き放つ。確實な、真
芯を貫いた甘く懐かしい感覚。拳に走る焦熱。

次の瞬間、オッサンの体は弾けるように後ろへ吹っ飛ぶ。

「つりおおおおおツツ？！」

豚のような悲鳴を上げ、三メートル程飛ぶ。そのまま、口口口口と
転がり、出入り口を出て、店から五メートル離れた所でオッサンは
停止した。

ま、加減してあんなもんか。

今のは寸剣、俺の打てる中では最小の距離で放てる中で最強の打
撃技だ。……もっと飛ぶとおもったんだがなあ、やっぱリナマつて
らじあ。

「ん？」

ふと見ると魔王さんが呆然と俺を見ていた。

「……店員君、君、武道家だったんだ？」

「ええ、食えなくて今じやコンビニ店員ですけどね。あ、あの
おっちゃん店外なんでおとお願いしていいですか？」

「へ？ あ、ああ、わかった。後は我が輩がやります。」

魔王さんが店外 つまり結界範囲外 を一歩出た直後、倒れるオッサンめがけ特大のファイヤーボウルが炸裂した。……ありや、金治半年ぐらいいかな。

さて、と。

しみじみと自分の名札を見つめる。あらゆる存在が弱体化するコンビニ テックドライバー、ラスダン支店 において例外はもうありません存在する。

店員の証たる名札を持つ者のみが結界の影響を受けつけないので。

「どおれ、品物並べ直すか……？」

店の出入り口で手力い雑巾 否、オッサンの回転に巻き込まれて倒れている勇者を発見。

ま、生きているみたいだからいいか。

今夜も退屈だな。

深夜の日常（後書き）

次回はバイトの女の子が出てくる予定……です。

午後七時の日常（前書き）

お待たせしました。

なんか思つたよりも好評で驚きました。

正直、ストックが少なく文を書くのも遅いので、待たせるかもしけませんがよろしくお願いします。

午後七時の日常

ペ「一

「あありがとうございましたあー」

「ましたあー」

去つてゆくオーク族のお客の広い背中を見送りながら、反射的に発したあいさつが重なる。

時刻は午後七時、日勤が終わつた魔王城のラスダン勤務の魔族が、帰り際に買い物に来る夕方の繁盛期も今日は珍しく早めに終わった。店の外は深夜の時と相変わらず真っ暗だ。まあ、ダンジョン内だから当たり前なんだが。そもそも、ラストダンジョンは構造上は魔王城の真下の地下にある、というより魔王城が広大なラストダンジョンの上に建てられたという方が正しい。

かつて存在した、今なお持つて正体不明な超文明保有古代種族、通称『前方を外れた者』アウトフロント

彼らが作ったとされる世界に数ヶ所存在する無尽蔵かつランダムな資源と増殖構造を持つダンジョンも、徐々にその機能の低下を示し五十年前から大体が機能を停止していった。

その中で、南方の蛮族と言われた魔王国、その魔王一族が管理しているダンジョンが、今なおその働きを維持している。

現在の超重量子魔術炉を中心設計とするダンジョンの全ではアウトフロントの管理していた頃より暴走状態にあり、構造も意味不明

かつ、非常に危険な場所となり果てている。

しかし、人の欲望はしぶとくたましく元気よく。

ダンジョンを探索し、生成されたレアメタル等を持ち帰る「冒險者」と呼ばれる職業が現れることにより、ダンジョンは一躍、一攫千金の戦場となり時代をつくる事になった。

しかしそれも先程言った機能低下により、ダンジョンは次々と封印、または枯渴を恐れ、保有する国のみが探索出来る場所が増えていく。

自由人たる冒險者には凍える冬の時代の到来だ。

ただその中で、この魔王城地下ダンジョンのみが古くからのダンジョンの在り方、即ち、

『力を示し、試練を乗り越え、相応しき代価を獲る血の鍛錬の場』

としての方針を変えなかつた。

それ故にこの魔王城地下ダンジョンには多くの冒險者達が群がることとなる。

そして彼らは此處をこう呼ぶ。失われゆく中、唯一残る正真正銘のダンジョン。冒險者達の最後の楽園。

『ラストダンジョン』と

とはいっても世の中そつ美味しい話ばかりではなく、魔王城独自の
といつかかなり魔王本国位な ルールがあつたりするわけだが。

ま、人間冒険者なんてヤクザな商売じゃなくて、地に足つけた商売やつたほうがいいんだよ。例えばコンビニ店員とか。

「あ、もう七時だね、リド、そろそろあがんなよ。弟達が待ってるんだろう？」

俺の傍らで先程一緒に客を見送ったバイクの女の子 リド・ベイカー、半魔族の十六才 に声をかける。

「あ、はい！ ジャああがりますね」

薄い褐色の肌、半魔族特有の、人間との混血の証しである緩やかに、少し尖った耳と後ろでにまとめられた黒髪。俺より頭一つ低い百五十前後の身長を構成する、成長途中の少女特有の薄い胸と細い手足。

「ロロロロとめまぐるしく、活発な表情と明るさ、そして大きく開かれた若者らしい汚れのないグリーンの瞳が印象に残る少女だ。：：：」 こいつ眼を見る度に、自分の眼が薄汚れていることを自覚するんだよなあ。

「あ、あとで、今日も廃棄弁当あるんだけどもつていきなよ。弟さん達、結構食べるんだろ？」

売れ残りの廃棄弁当を持つて帰るのは建て前は禁止だが、正直それほど守られてはいない。食い物無駄にするのは色々申し訳ないし。

「ありがとうございます、ジムさん！ 弟達も喜びます」

渡された弁当入りの袋を受け取り、リドが微笑む。まるで花が咲くような自然な笑み。

リドは余り、というかかなり家が裕福ではない。加えて父親がない家庭だ。元被差別種族は大体が貧困層にある。平日は学校に行き、五時から七時まではテッドラインでバイト。その後は兄弟達の世話。休日はほぼコンビニでバイト三昧。若者らしく遊ぶヒマはないだろう。

三ヶ月前、魔王さんの紹介で、初めてうちの来た時の彼女はひどくおどおどとした、今にも泣きそうな少女だった。

その萎縮した態度の原因が、元被差別種族として周りからなじられた経験からだと知った時は、俺のよつなすれた人間でも彼女をなじつた身も知らぬ誰かへ胃液がこみ上げるむかつきを覚えたものだ。しかし、根が明るいの娘なのだろう、だんだんと打ち解けて、その性格の陽の部分を見せていくリドを見る度に俺は胸をなで下ろす。
……なんだ、まだ俺も多少人間らしく振る舞える部分があったのか。

「じゃあ、お疲れ様でしたジムさん」

「ああ、お疲れさん、リドまた明日……ん？」

視界が急に暗くなる。店の電灯がいっせいに消えたのだ。

「キャッ！ ジ、ジムさん！？」

リドが思わず俺にしがみつく。……リドしがみつくのはいいけど、襟引つ張らないで、制服伸びちゃうから。

「リード、落ち着け。」この店で「いつこう」と仕掛けたのは十中八九……」

そう、冒険者の戦闘に巻き込まれても耐えられるよう、魔術、物理両面で超強度の設計とサバイバリティが確保されたアッシュドラインでこんなことを仕掛けられるのはただ一人。

「ただああいまああッ！」

シャウトとともに極太のスポットライトがレジ前を照らし出す。
…おい、この店にこんな設備あったのか？。

輝く光の場には、ポーズを決める人影。

身に纏うは漆黒、スラックスのスーツ、胸元は大きく裂け、形の良い豊満な乳房の谷間どころか、へそまで覗く。スラリと伸びた背丈は百七十後半ほど。砂時計を連想させる見事なプロポーションには長く引き締まつた四肢が連なる。

腰まで伸びるブロンドの長髪にスーツと対を成す純白の紳士帽が乗っていた。朱く紅を刺された唇が艶めかしい。

そしてもつとも眼を引く特徴、その顔上半分を覆っている仮面。幾何学的紋様で形作られ、キツネを模した仮面だ。

そう、この一応は二十代後半らしき、女性らしきものが、

「いやああー、『無沙汰！』

その手に握られていたのは煌めく長い棒。というか、あれはオーハルコン製モップ。後ろを振り向くとやはりモップはすでにはない。アイツいつの間に取りやがった。

モップの柄をつかみながら、華麗にステップを刻む。やがてその動きが艶めかしく、扇情的な動きに変わった。

「 ていうかアレポールダンスじゃねえか……

艶めかしい腰の動き、肢体を見せつけるような舞。クルリと棒を一回しさせ、足と足の間に挟みながら、最後のポージングを取つた。

「 ……す、」

呆然と見ていたリドが、不意に言葉をつぶやく。

「 そうこれが、

「す、」「いです店長！　す、」「いかつこよかつたです！　やつぱり店長つていろんなことができないとなれないんですね！」

リドの眼に嘘はなかつた。純粹さ百パーセントの憧れの視線だ。リド、そつちにいくな、戻れ、戻つてくれ、頼むから。

「 れがうちの、ラスダン支店の店長だ。

「 もおおう、あありがとウ！　オウプリティーガールッ！　ベリー
プリティーガールッ！」

モップを放り投げ、リドへ脱兎の勢いで飛びかかる店長。

「 あ、おかえりなひや、ムグツ」

そのままリドの頭を豊満な胸で熱く抱きしめる。

「出張中寂しかったヨー。リドかわいいよリド！ リド可愛すぎで生きるのが辛イ！ わあ私にロリコーンを吸収させドー！ ロリコーン吸収ウウウツ…」

なんだロリコーンって。そんな物質あるか。リドが乳に圧迫されて呼吸できなくなつてるゾ。

「……店長、ずいぶん早く出張終わつたんですね」

たしか帰るままであと四日あるはずだ。

「おお、ジム君！ 元気にしてタ！？ そうだジム一ウムも補給しないト、ジム一ウムウウ！」

「触るな」

リドを離して向かつてくる店長、おれはとつさに店長の頭を掴んで抑える。店長のジタバタと動く手が空を泳ぐ。

「触るな抱きつくな類すりするなー。ついでにジム一ウムなんて物質は存在しねえー！」

「オウ、ジム君ツンなノー！？ ツン時期なノー！？ デレ期が来たら教えてネ！」

「デレ期なんぞねえよバカ。」

「で、なんで早く帰つてきたんですか？」

リドを帰した後、客がいなくなつた店で、俺は店長に問い合わせる。正直な話、なぜ戻ってきたか検討はついているが。

「んー、ジム君わかつてて聞いてるドシヨ？…………」の間ジム君が起きたお客様追い出し事件です！」

店長のふやけた口調が急に止される。……やはりそれか。

「魔王さんから事情聞いて、慌て向こうで話をまとめて帰つてきたんでス。ジム君、お客様に暴力を振るうのはいかなる場合にも許されません。わかつていますネ？」

「……ええ、わかつてますよ」

「ジム君、私があなたをこの店に呼んだのは、素手による強力な戦闘力を持つことが第一の理由でス。

結界が効いた店内でも、冒険者のございぎはあります。しかし、店員が武装するわけにはいきません。お客様に無用な圧迫を与えるわけにはいけないからでス。この店は安らげる場所でなくてはいけないんですから。

それ故に、拳士として素手で戦場を生き抜いてきた君をこの店に呼んだんですヨ！」

思い出す、七ヶ月前、俺は戦場でのキツネ面に任せられた。

「……別に、辞めるとこつなら辞めますよ」

正直、あのオッサンを殴り飛ばしたことに後悔はなかつた。
フウッと大きく、店長が嘆息する。

「私がいいたいのそういう事ではありません。君が軽々しい行動をするに色々な人を悲しませるのですよ。何よりも私が悲しい」

「…………」

「どうにも言葉が出ない。所詮俺は自分のこと以外には責任のとれない人間だ。」

「まあ、あのオッサンは出禁ですから客ではないですシ、魔王さんからも不敬罪で国外追放処分だそうですかラ、うちに来たら、うちは全く禍根も遺恨も残らないんでしょうでもいいんですけど」

「………… オイ。」

「特に問題なかつたなら今までの話はなんだったんすか?」

「ジム君の深刻な顔が可愛くてついやつてしまつた。今は反省していいル」

「オーケイ、償つ心はあるらじい。」

「じゃあ死ね」

即座に放つ鉤突き ボディーブロウ 、しかし店長はふわりと一撃を避ける。

何をやっているかわからないが、武術らしき心得はあるんだよな

あ、「トイツ。

「相変わらず速い拳速ですね。ジム君、戦場にいた頃よりいい生きた田をしています『三』」

飄々と、掴みどりなく店長が再び話しだす。

「やはつここのまつが君にいい影響があるよつでス」

「俺としちゃ退屈で死にそうですけどね」

生きるか死ぬか、一択しかない戦場の日々は今とは名段に違う緊張感があった。

「我がデッドライン社がこの魔王国に出店出来たのは、魔王さんの被差別種族などの貧困層の労働の場を増やしたいといつ意向とマッチてきたからでス。わずかなところで現れる被差別種族への軽視、過去にある種族同士のしがらみや軋轢が貧困層の労働の場を奪つてしまウ、しかし外国人たるデッドライン社ならそれらにとらわれず、雇用を提供できるからでス」

実際、今の魔王さんの決断と政策がなければリドがまともに生活や就職、進学をできたかは怪しいだろつ。あの酔っ払いのオッサンが言つていた「客を取る」それが事実になる可能性は十分にあつた。だからこそあの使い古された下衆のセリフに、柄にも無く俺がキレた理由だった。

「ジム君、物を売るところとは幸せを貰えるところです。物

を得ることは一番手っ取り早い幸福なんですね。』

幸福とは本来は己の内に問う物ですが、この世のほとんどの人間は物質的な豊さが幸福へ繋がります。

私は高潔な人間ではありません、だがそれでいいと私は考えます。俗物であるがゆえ、この世に一番多い俗人の幸福がわかるのでス。だから私は君にも知つてもらいたいのでス。どれほどに俗で、せせこましくても、多くの人に幸福を与えるこの『コンビニ』の仕事の良さ♪』

汚れない者がどれほどに気高く高潔な理想を説こうと、泥だらけで今日を生きるものには届かない。同じ泥にまみれた人間の言葉だけが、汚泥の底で必死にもがく人間を突き動かす。

この世の多くの人は論理的な正しさだけでは動かない。感情と好き嫌い、発言者の人間性が判断に大きな影響を与えてている。そういう意味では店長の在り方は正しいのだろう。でもな、俺はあんたみたいに俗を俗として悟れねえんだ。

「……店長の言いたいことはわかります。だが俺は仕事は仕事と割り切りたいタイプでね。仕事が好きか嫌いかまで指図されたくはないんですよ」

「んー手ごわいですネエ。でもそういうほうが私落とすのに燃えるタチですヨ！ それにほら、好きなほうがやる気が向上して見られますから、その時はボーナスとかあげちゃうかもヨ」

ボーナス？ そんなもん配る気ほんとにあんのか？

「……店長、そういう場合は時給上げるっていうもんじゃないんですか？」

「人件費を容易に上げるのは経営上あまり良くないですか、そうですね」

ふわりと片腕を俺の首の巻きつけ、ピタリと腰を密着させた。気温が高かつたからか、ポールダンスのせいか、店長の体は少し汗ばんでいた。甘つたるい、女独特の体臭が鼻孔を占領する。

「現物給」なんてどうしよう、例えば……」

俺の耳元で店長の唇が艶めかしく蠢く。吐息混じりに囁き始めた。ていうか近い、顔が近い！

「私の体を一晩自由に出来るとか、いかがでス？」

「断る」

誰がのるかボケ。

「早ツ！ 決断早ツ！ ひどいよジム君、ちょっととは迷つてヨー。」

店長を引き剥がし、距離を取る。ちょっとマトモな話をしているところだ、全く油断ならねえ。

「じゃあここに紛れて己の欲望満たそつとしてるだけだろお前は」

「美人コンビニ店長が熟れた肉体を持て余して、店員のやる気上がるなんてよくある話じゃないですカ！ ハロマンガとかの世界だト

「現実を見ろアホッ！」

ああ、頭痛がしてきた。

「店先でなにやつとるかお前らはッ！」

突如響く一括、振り向けば、美貌の魔人、魔王さんが立っていた。
……ぐそ、入店アラームに気づかなかつたぞ。

「店先でナニをしてこるんだお前らー！　この破廉恥め！」

魔王さん、また顔真っ赤になつてゐよ。

「……店長に口説かれたので全力でふりました」

「部下を全力で口説いたのですが、全力でふられました。とても悲
しい」

「具体的に何をやつてたかじゃなくて、店先でやるなど言つてゐん
だ！」

どうも魔王さん、いつこうことには免疫がないらしー。

「あー、はい見苦しくてすこませんでした。といふで魔王さん、今
田は一体なんの用事で……」

「つむ、実は……」

「ジム君、それはいけません」

急に口を挟む店長、なんだよ邪魔すんなよ。

「魔王さんは大事なお得意様でス。サービスマンとしてお得意様の」とを覚えて、察し良くな動くのは当然です」「魔王さんがみなまでこう前にそれをするのでス」

「……じゃあ、魔王さんがなんのためにきたか言わなくとも店長わかるんですか？」

「モチロンです」「…」

一歩、自信満々の足取りで魔王さんの前へ出る店長。

「こりゃしませ魔王さん… 魔王さんが毎月お求めになられるハード路線系BL誌『薔薇貴族ワイルド』ヘタレ盗賊受け特集号は今月ももちろん入荷しております。雑誌コーナーに置いてありますからどうぞお求めください…」

「全ツ然ツ、違つわバカたれツ！」

やつぱだめじゅねえか。

午後七時の日常（後書き）

感想、指摘、質問、苦情、泣き言などありましたら感想欄でお受けしますので、遠慮なくどうぞ。

魔王さんの日常

私……じゃなくて我が輩は、ああ、めんどくさい！

なんで魔王に即位したら喋り方までかえなくちゃいけないんだろ？
でもそうしないと秘書官のアリスがうるさいんだよなあ。

つづづく私には魔王は向いてはいなかつたと今更ながら思つ。

三年前、私は父上から王位を奪つた。魔王国での正当王位継承方
二種のうちの一つ、「力による篡奪」すなわち自らのみの力で前王
を殺した。……正確にいえば、あれは闘いですらなかつた。
何も知らなかつたバカな小娘が、バカな暴走をして、周りにその尻
拭いを押し付けた、ただそれだけの情けない話なんだ。

それでも私には成し遂げねばならないことがあるし、魔王として
の責務を果たさねばならない義務がある。あきらめも泣き言も言つ
資格はどこにも無い。

魔王国に置いて、魔王の責務は一つ、一つは政まつり、政治に責任を負
うこと。

そして魔王国国王独自の責務、「ダンジョンにおいて先頭指揮を
取る事」

魔王国では、個人の力が持つ意味は大きい。それは魔王城地下の
ダンジョンを鍛錬の場とする歴史へとつながる。

その方針は昨今の世界中のダンジョンの衰退にも変わることは無
い。

だが、うちの国はうちの国なりに強かだつた。

「ダンジョンでは力のみが法である」とし、極最低限が整つたダン

ジョン内限定法を成立。早い話がダンジョン内では冒険者達は探索の成果であるレアメタルや貴金属類等を略奪されても、己の力で取り戻せ！ イヤならダンジョンに入るな！ という実にアグレッシブな法律だ。

こうしてラストダンジョンでは冒険者や魔族が入り乱れ、奪つたり奪われたりを繰り返す疑似的な戦場となつた。

そして魔王は魔族達の先頭にたち、冒険者達を蹴散らして成果物を全取りするいわゆる「ボス」としての役目を負うことになる。

……まあ、早い話が冒険者の上前をハネる仕事なわけだ。

元々、強大な魔力を持つのが魔王族の特徴。それを頼られるのは当たり前の結果だらう。

正直私は戦いはあまり好きでも得意でも無いが、先頭を張つて目立てばそれだけ国民からの人気も上がる。

そんな私が必死にやる氣出してるのに中にはアホな冒険者もつて、ああ思い出したらまた腹立つてきたあのバカ勇者あああああっ！

それはそれとして、今はデッドラインの店長と一つ話さねばならないことがある。ついでにリドの顔でも見に行こうと寄つてみたわけだが……なんで店先でイチャついてるんだこの店長と店員は！？

「あ、失礼しました魔王さん。『薔薇貴族ワイルド』ではなく、耽美系路線の『B-Lady女Aチーム』のほうでした力？」

「そうじゃない！ ああ後でどっちも買つけど。私、じゃなくて我が輩が話したいのはこの間の……」

「……申し訳ありませんでしタ魔王さん」

「……へつ？」

深々と頭を垂れる店長。完璧な謝罪の姿勢。

「先日のジム君の暴力事件はひとえに私の指導不足によるものであり私に責任があります。本来店員がお客様に暴力を振るうことは許されません。しかし彼にも彼なりに許せないことがありやつてしまつたことなのでス。どうか魔王さん、私たちを許してください」

「……店長」

店長の後ろでは店員　たしかジム・スミス　が普段冷静な彼らしくない、オロオロとした様子で店長の背中を見つめていた。

「い、いや店長、別にその件は追求するつもりはないぞ！？　大体あのバカは国外退去だし、リドの事をあんなふうにいってたら私だつて怒る。もうあの件は終わりでいいんだ！」

「……ではこの件は終わりといつ」とト？」

「ああ、終わりだ！　無しでいい」

店長が急激に姿勢を伸ばす。そのまま勢いよくターン、ブロンンドの長髪をなびかせ、ジムの方へ振り向いた。

「ほりネジム君！　やっぱり大丈夫だったでシヨー！」

……しまつた。つい勢いで許してしまつたけど、この件盾にして色々要求通したりとか出来たじやないか！

「ところで魔王さん、一つ聞きたいのですがジム君がオッサンを挑発した時にかなり口汚いこといったそうデ。一応本社に詳しい報告書を書かなきやいけないので証言として具体的に何を言つたか教えてもらつてもいいですか?」

「え、言わなきやだめなの?」

かなり口に出すのもばかられるくらいアレな言葉だつたなあ。

「ヤニの本人に直接聞いてくれ。わた、我が輩は言いたくない」

「じゃ仕方無いですネ、ジム君もつ一回言つてみテ」

店長と私の視線がジムに向ぐ。気まずそうな顔をしながらジムが小さな声で呟いた。

「……この××××野郎、です」

やはり何度も言いたくなかったのか、今にも消え入りそうな声だ。

「ちよつと聞こえませんヨ。ほらジム君男の子なんだからもつと大きな声デ」

「この××××野郎」

先ほどよりはつきり聞き取れる声。店長もピクリと反応を示した。

「そ、そんなこと?…… ちよ、ちよつと聞き取れなかつたのでも

「一度お願ひしまスジム君」

……あれ?

「この××××野郎」

「うんうー……せ、もう一度お願ひしまスジム君」

店長がビクリと背を震わせた。両手で自分の体を抱きしめながらなにやらもじもじと身をよじらせる。

「この××××野郎」

「あン……もっど、もっと強くー!」

ええと、これか……

「……この××××野郎つー!」

強まるジムの語氣に連動するように、店長の身のよじりが大きくなる。こつしか店長の呼吸には熱を孕んだ吐息が漏れていた。

「はあ、はあ、……ジム君、もっともっと強く言つテー!」

「…………このう、××××野郎ー!」

「うんうんつー……良こですよジム君、もっど、キツく罵つてー!」

「お前は俺に向をやりますんだよー!」

「だからお前、向をやつてるんだ！」

ジムと私が同時に突っ込む。店長の仮面に隠されていない顔の下半分と首もとがうすらと赤がさしている。

「……いや別に上司の言ひことに従つただけなんですが」

「思いがけずなかなかツボにハマる言葉だつたのでつい堪能してしまいました。口汚いジム君もなかなか新鮮ですね」

「だ、か、ら、つ！ 何をしてたかじやなくて店先でやるなと言つてるだろ？！」

思わずレジの机を叩き叫ぶ。ああもうだめだ、こいつら、といふかこの店長と話すといつも変な方向に話が進む。ひとつと話を終わらせないと。

「わた……ああもう私でいい！ 私が今日来たのはヒールスポットの撤去を命じるためだ！ 魔力を回復するヒールスポットは冒険者の過剰な支援につながるから使用禁止にする」

首をかしげ、少し困った仕草をする店長。言つてやつた、散々話そられたがとうといひひてやつたぞ！

「んー、正直うちとしてはヒールスポットは大人気なので使用中止はキツいですネ。それにほら、魔族の方も使用しているんですよ？」

「それは別に私のほうから言い渡す。とにかくヒールスポットは撤去。これは確定だ。いやならダンジョンから出て行つてもうおつか？」

「仕方ありませんね、……ジム君ちょっとホットスナックの『からあげ氏』揚げてくれませんか？ 十個ぐらい」

ジムが不思議そうに眉をよせる。

「……？ 店長、からあげ氏は五個ぐらい揚げてあるのがありますよ」

「わかつてますワ。それでいいんでス。ほら早く向こうのフライヤーで揚げてきて下さい」

店長に促され、いまいち納得いかない表情のままトボトボとフライヤーに向かうジム。

「さて、魔王さん。これをお読みください」

レジの足下の棚から取りだしたビニール袋。その中から取り出されたのは一冊の本。やたら薄く、表紙にはカラフルな漫画の絵が……つてこのキャラクターは？

「これ、ジャンプの漫画のキャラじゃないの？」

書いた人間は違つようだが、デザインには見覚えがある。

「おやそのキャラを『存知ですか、さすがですね魔王さん。まあまづはお読み下さい』

言われるままにページをめくる。ていうかこの内容は……

「B-Lじゃないか」「レー!?

「やつ、これは私の国の伝統工芸作本技術『ドウジンシ』で作られたB-L本です」

「おっ、しかもなかなかハード!」

「魔王さん、もしヒールスボットをこのままにしてくれるのでしたら、ドウジンシを注文できるカタログを毎年夏と冬にそちらにお送りいたしますが?」

店長の眼が怪しく光る。コイツはいつでもそ�だ、相手の趣味や傾向を細かく調べ、ワケのわからんツテやコネ、手練手管で籠絡にかかりてくる。また絶妙に私の趣味にジャストミートな物を!-

「私を買収する気か!?」

「いえいエ、これは正当なる取引です!」。なにせ魔王さんに指図できる者などいないんですか?」

「まだ迷っているようですね。じゃあ最後の切り札でス。実はうちの店には毎月新商品のサンプルが届くのですガ」

「……それがどうした?」

「私のツテで魔王さんの所にスイーツの新商品のサンプルを回せるよう手配できまス。ちなみに来月の新商品は『フルーツマートの涼夏ゼリー』でス」

なにそれ食べたい。ていうかトマトがデザートになるの？

「……毎月届くのか？」

「ええ、一種から三種類ほどですネ」

「……カタログのドゥジンシリコーンのね……その、受け取り場所の指定を魔王城じゃなくてこの店にも出来るか？　見つかると秘書官のやつがうるわこんだ」

アリスに見つかるとはまさに捨てられた物になるからな。

「お荷物のお預かりなら承ります」

……やはりの店はサービスがいい、良すぐ。

「仕方無い、そこまでいふなら次の条件改正まで一年、待つてやるのじゃないか」

これはアレだ、欲理に負けたんじゃない、あえて相手の手のひらに乗ると見せかけて、ヒールスポット撤去より大きいメリットを得るためにアレだ、交渉術とかそういうやつだ。そういうことにしてもおひつー！

「あつがとうござまス魔王さん！　あ、もちろん届いた荷物には間違えないよつ『魔王様用B』と書いた紙を貼つておきますから心配しないで下さイ！」

「それは止めてくれ」

魔王わざの日常（後書き）

試験的次回予告

「ハアーハー、『店員さん』にかけつ。『店員&店長』の『誰にでもマニアズかけるぜ』『店長でスー』」

「……お前言葉の意味をキチンと理解して言つてみよな？」

「突っ込みがローテンションなジム君にランボー怒りのマニアームツ！」

「ああ、止めや、『ハラ』、うわづヌルヌルする！ 田に入った！」

「次回のダンジョンコンペニー ハッピーラインは『I think I, I'll participate in the triathlon with my old, one-speed bicycle.（トライアスロンにて、買い物用の自転車で出走したいと思います）』でス。それではシーコーネクストタイム！」

「トライアスロン舐めすぞだろツ！」

店長の言動と次回の内容は全く関係ありません。

オーガと潜るつゝ

結構冷えるな。

幅二メートル、高さ四メートル程、左右と天井を覆う黒き壁は有機的なラインを描き、うねつている。壁に斑状に取り込まれている発光機関は思いの他強く、視覚には問題は無い。おかげで念のために持ってきた照明道具は無駄になりそうだ。

このような通路のサイズや、壁についている発光機関の存在は、作成者である謎だらけの消えた超技術保持種族、前方を外れた物が少なくともサイズは人類とそれほど変わらず、俺たちと同じ光を使った視覚を持っていたと推測出来る。

まあ、それでも謎だらけなんだが。

遙か古より世界中にあるダンジョンは、一体いつ頃からあつたのか全くの不明だ。中心にあるとされる、魔力を生み出す重魔力炉芯の構造原理も不明、なぜ今になつて魔王城以外のダンジョンが枯渇しているのかも不明、その他まとめだしたら切りが無いほどの不明点だらけだ。

ダンジョン　に成る前のアウトフロントの造つた何か　　の開

発目的は重魔力炉芯による魔術エネルギー発生、もしくは希少物質作成施設ではないか？　というのが大方の意見だが、魔力を吸収することにより再生、増殖する構造体が暴走　　超長期経年劣化によるもの、というかそれ以外原因が思いつかない　　することにより施設は「迷宮」へと変質してしまった、というのが現在の主流の説となっている。

今この状況じゃんなこたあどうでもいいんだが……

視覚に問題は無い、といつても流石に遠くは薄暗い。通路の向こう側は闇が横たわっている。そもそも構造体の増殖具合によつては照明が十分ではなかつたり、危険な構造になつていていたりする事も多々ありのんびりと氣を抜く」とは出来ない。

最初の作成理由はどうあれ、最早ダンジョン（じこ）は血と闘争、欲望と栄光を得るための戦いの場。油断すれば即、死が待ち受けている。

「先輩、ちょっと荷物持つてもらえませんか？」

歩を進める俺の背中へ、投げかけられる落ちついた男の声。

「お前は運搬、俺は安全確保。そういう役割分担だろ？ 文句言わずキリキリ歩けよダイム」

振り向いた先には巨大な人影。

一メートル三十センチの背丈、分厚く密集した筋肉、浅黒い肌、針金のように生い茂る髪とそこから覗く一本の角。顔付きは骨張り、掘りの深い、奥に潜む目は爛々と輝く。口元には下の犬歯が一本頭を出していた。

そして、その戦闘力溢れる雰囲気をぶち壊す、オレンジと白の暖色ストライプの「テッドライン」の制服の上着。

「そつは言つても僕もつ結構持つてるんですよ？ そりそろ変わつて下さこよ

「お前戦闘はキレイだし下手だつて言つてたじやねえか。適材適所だ、大人しく運べ」

この鬼人族オーガは十八才の青年ダイム。オーガでも恵まれた体格の持ち主ながら、普通は荒くれ者や闘争中毒の多いオーガの中でも珍しい大人しい性格のヤツだ。

実家は代々虐殺戦スローター鬼の称号を持つ戦闘職だそうだが、本人は進路に大学を希望、親と喧嘩してバイト浪人をしながら一人暮らしをしている

希望学科は「迷宮生物学」 デッドラインのバイトに希望したのもダンジョン研究観察も兼ねてだそうだ。

ダイムの肩から下げるされたそこそこの大きさの銀色の箱 保温機能付きのキャリアー が揺れる。

歩きながら手書きの地図を確認、現在の階層は地下十五階だ。

「そろそろ次の階層の階段が見えるはずなんだが……」

「先輩、その地図手書きなんですか？ ダンジョン事務所で売ってるやつじゃなくて？」

ダンジョン内のマッピングした地図はある程度までならダンジョン入場受付の事務所で手に入る。

いわゆる魔王城の外貨会得、小遣い稼ぎなんだがこれがそこそこボる上に、トラップが表記されないので。

「大丈夫だつて、夕方タバコと新聞買いにくるゴボルトのおっちゃんたちいたろ？ あのオッサン、ダンジョンのトラップ設置と怪我人回収係の人たちだから。あのおっちゃんたちから聞いたやつだか

「心配無しよ」

「ボルト族独特的、キツネのぬいぐるみのような横顔と、その見た目に全くマッチしない年齢と性別にそつたやたらダンディな声のオッサン」ボルトのシゲさんを思い出す。

「やっぱり戻って店長から地図借りた方が……」

「もうじきなんだ、すぐにつくよ。つたく、あのボケ店長また面倒なサービスはじめやがって……」

「ひしてダンジョンに潜る事態になつたことのせじまつを思い出す。

そう、あれは一時間前、出勤した俺に店長がやたら高コトソングで声をかけてきたあの時からだ。

「ジィームツくーんツ！」

出勤一番、俺の顔を見た途端に飛びかかる店長の顔を間一髪、掴む。力を込めながら抑えた。

「オウ、遠イ！？ ジム君との距離がとても近くて遠イ！ これが心の距離！？ でも肉体の距離さえ近ければ私はいつさい構いません！ カモン、零距離射撃！」

「だ、か、ら、抱きつくなは止めてもらえませんかねって、暑苦しんだよおおおツー！」

狭いスタッフ室で無理やり店長を引き剥がす。店長が口元で指を

くわえながら残念そうな仕草を見せる。

「むー、ジム君にはちょっとお出かけしてもいいのだが、今のうちにジムニーウムを吸収しようと思つたのー!……」

店長の服装は先日のスーシではなく、店の制服であるシャツとスカート、Hプロンだ。それでもやたら胸元を強調するのは忘れない。

「ジムニーウムは存在しねえと……お出かけ?」

「ええ、ジム君、お出かけです!」。ちょっと地下一十階まで、商品の配達にネ」

店長の足元には銀色のキャリアーが一つ置かれていた。

「……配達?」

「……つまり、ダンジョン内配達サービスを始めたから届けてこい?」

「ええ、そういうことでス。ジム君頑張つて!」

十五分後、店長の説明を聞く所によると密の要望を受け、ダンジョン内へ商品を配達するサービスを試験的に開始するといふ。

「でもね、店長。ダンジョン内だと手すりや商品を盗られても文句は言えないんですよ」

「デッドライン内なら通常の魔王国の法律が適用されるが、一歩外出たダンジョン内ではダンジョン法が適用される。これは『デッドラインの店員も例外ではない。つまり商品が取られたり襲われる可能性は十分にある。

「だからこそ『デッドラインの暴力装置』と影口叩かれてるジム君の出番なんですねー。」

「……誰だ『デッドラインの暴力装置』って言つたヤツ?..」

「どうやらそういうとよく話あって平和的解決を目指す必要がありそうだ。主に肉体言語を使って。」

「まあ、二十階までなら大して強い魔獸もないでしょうし、行けると思いますけど」

ダンジョン内は充満する魔力により、独自の発達を遂げた生態系が構築されている。最も強く魔力が充満する最高階層を頂点として、外の野生動物を数段凌ぐダンジョン内生物、通称『魔獸』がダンジョン攻略の難易度上昇に一役買っているわけだ。

ちなみにデッドラインのある場所は地下十階、地下二十階なら中堅冒険者がうろついて階層だ。俺なら問題なくいける。

「そう来なくつチャ! 念のためダイム君をつけますから頑張つて下さいネ」

「所で届ける商品つてなんですか? あんまり重いのは勘弁なんですか?」

「ふつふつふ、実は我がデッドラインの田玉商品なんです！」

屈むながらふたを開ける店長。谷間が見えそうになるが辛うじて目をそらす。コイツわかつてやってやつてんな。

「あら、ジム君別にもつと見ててもいいんですけど…… セア、これがうちの田玉商品です！」

店長の掲げた四角形の物体。といつか「ンビニ弁当」。

「『辛せうで辛くない少し辛いあつやつぱすげー辛いだめ！ 後からきた！』これだめ！ 死ぬ！ な食べられるラー油を使った特選牛カルビ重弁当』でス！」

「ただの激辛じゃねえか！」

「牛肉は高級な物を使用した前日予約のみ販売、一個三千ギル、限定二十食を全部注文してくれたありがたい大口のお客様がいるんですヨ。あ、あとついでにこれも注文してました」

魔王国で肉体労働者の平均田給は八千ギル前後、確かに高級だ。更に店長のだしたもう一つの箱。書かれた文字は「デラックスク世界のウサギコレクション」

「……食玩ですか？」

「ええ、世界中のウサギのミニフィギュアでス。ワンカートン大人買い、シークレット狙いですかネ」

「リードダンジョンですよ？」

弁当ならわかる。探索中の食事目的だらう。たが食玩は何に使うんだ？

「ま、私たちはお客様の要望に応えるだけですから、細かいことは気にしない！ それじゃ いってらっしゃイ」

なんかわからんつーか、誰なんだこの注文した「サイトー」つて？

うつかり種族名を聞き忘れたが、ダンジョン内にいるなら魔王軍か冒険者のどちらかだろつ。とりあえず、今することは。

「先輩、アレ……」

ダイムが前方の薄闇を指さす。通路の先、階段前に広がる大広間のよつやな空間。

「ああ、知ってるよ

とつぐに察しあつてゐる。なんせ剣を打ち合つ金属音が狭い廊下に響いてゐるんだから。

剣士の打ち下ろしを、掲げた斧でオークの魔族が防ぐ。バックステップで下がる剣士、オークの反撃の斬撃が宙をなぐ。もう一人の戦士の槍が、別のオークに突き出される。とつさに身

をひねつたオークは槍を掴み戦士の動きを封じようとした。

「……戦闘、ですよね、これ？」

困った表情でダイムが尋ねる。

「ああ、戦闘だな、ダイム」

魔王軍の魔族対冒険者、ダンジョンなら日常茶飯事だ。

「どうしますか？ 階段は向こう側ですよ」

「そりやお前、やる」とは決まってんだろ

「こやかに、できるだけ愛想を振りまきながら四人の死闘へ近づく。

「ちわあーす、毎度ありがとうございます、コンビーテッドラインです。配達の邪魔なんで早く済ませるかぞいてもらえません？ ダメなら実力で排除しますけど」

「先輩イイイイツツー？」

オーガと潜れバー（後書き）

試験的次回予告2

「店長の魔の手を逃げ出したジムを待っていたのは、またしても地獄だった。

明日をも知れぬ暗闇でもがく、それだけが冒険者生き様。

血と闘争、修羅のダンジョンでジムはこの世の乾いた真実と出会い、配達の先に幸福などない。

次回、ダンジョンコンビニ『テッドライアン』誤配

コンビニ店員はみな愛を見ない

「……シゲさん何やつてんすか！？」

「おひ、ジム。ちよつと店長に次回予告頼まれてな」

シゲさんの発言と次回内容に一切関係はありません。絶対にありません。

オーガと潜れりへ

「ちよ、ちよっと先輩!」

慌て駆け寄つてくるダイム。急に現れた大柄なコンビーの制服のオーガに、『冒険者』一名がギヨシとした顔をする。

「なにやつてるんですか、刺激しちゃダメですよ! お密さんなんだし……」

いやいや、この時はナメられちゃいかんのよダイム君。

「まあ待てって、ここはダンジョンだぞ? つかつに愛想よくして も……」

「なんで『テッドラインの店員』がこんな所ダンジョンにいるんだ? たしか店外の販売は禁止されてたよな」

「そりだよなあ、店長に聞いたら『うちは店外販売はしません』っていつてたぞ?」

動きを止めた『冒険者』一人、細身の剣士と太めの戦士がしゃべりだす。

「あれか、とうとう要望に応えて店外販売やりだしたとかか

「え、店外販売始めたの? 今日弁当忘れちゃつてさ、五百ギルく

「うーこの弁当売つてない?」

魔族の一人、いまいち顔の判別の付きにくいオーク一人も話しだした。

「お前まだ一日^昼飯代五百ギルかよ、カミサンにちょっとは交渉しろよ」

「うるせえな、うちのカミサンは魔王様より怖えんだぞ。そんな真似できるか」

オークも妻帯者は色々大変らしい。

「いや、うちが始めたのは配達サービスで店外販売じゃないんですよ。弁当も配達分以外は無いんですよ」

思わず顔をしかめるオークのおっさん。剣士や戦士も期待外れだと表情で語っている。

「だめなのか……^昼メシビ^うじよウ」

「大人しく上まで戻るか」

うんざつとした様子のおっさんオーク一人。剣士がしげしげと俺を覗きこみ、はつと^{氣づく}。

「あ、お前ジム・スマスだろー。」

「え?……あ、ほんとだ、『デッドラインの暴力装置』とか『鬼軍曹の軍曹抜き』とか言われてるジム・スマスじゃねーか」

おい、あだ名増えてんや。

「先輩、『鬼軍曹の軍曹抜き』ってそれもうただの鬼ですよね」

ダイム、オーラ鬼人のお前に言われたかないわ。

店には色々な客が来る。大体は魔族か冒険者、いたって普通に物を買つていいく。だが中には困った客もいるもので、そういう客は店長が冒険者協会に連絡するなどの注意をするのだが、それでもダメなヤツはいる。そういうのを店から追い出したりはしていた。主に殴り飛ばしたりして。

「ダンジョンに潜らせるならやっぱあんたみたいなヤツが必要なんだな。無駄に腕つ節のあるの雇つてんなとは思つたけど」

「まー、まだカリドちゃんみたいな子を潜らせるわけには行かないよなあ」

「さすがにリドみたいな子供をこんな所に歩かせませんよ」

戦闘能力が無い者がダンジョンを歩くのは間違いなく自殺行為、ちなみに店への出勤は魔王城へ繋がる非常口が店内にあるので、その辺は安全だ。

「やつだなあ、もしリドちゃんみたいな娘がダンジョン歩いてたら、俺は田舎地まで送つていいくよ」

「俺は帰りのコンビニまで送つていくな」

「あの娘、家貧しこけど頑張つてゐるって評判なんだよなあ」

「コドモちゃん見てるとなんか親戚の姪っ子を思つ出すよ」

「いつの間にか会話に入つてゐるオークのおつせんズ。それにしてもリド大人気だな。

「とこつわけで通らしてもうこますよ。早くしなこと弁当冷めますしね」

ピクリ、と髭の戦士が反応を示す。なんだまだ用があんのか？

「なあ、その弁当つてひょつして、『辛そうで辛くない少し辛いあつやつぱすげー辛いだめ！ 後からきた！ これだめ！ 死ぬ！ 喉が焼ける！ ああ、食べるんじやなかつた、俺のバカ！ な食べられるラー油を使った特選牛カルビ重弁当』じゃないか？」

「……ええ、なんか名前長くなつてゐる気がしますけど、多分それですかよ」

なんだ、何が言いたいんだコイツ。戦士がジリコとこじりよる。

「俺、それ予約しようとしたら店長『本田は予約終了でス』って断られたんだよなあ……」

「そうだな。それがちゅうほど腹が減つてゐる時に田の前にあるとせ……」

「…」

「一個二千ギルの高級弁当だつて、俺も食つてみてえなあ

「俺も俺も」

気がつけばオーク共も距離を詰めてきていた。……クソ、こいつら組みやがったよ。

「先輩、なんか雲行きが怪しいんですけど……」

俺の背後でダイムが心配そうに呟いていた。もうちょっとと団体に似合つた度胸つけてくれ。

「ダイム、ちょっと下がつてろ。すぐ終わる」

剣士が得物を片手にだらりとさげ、俺に再びしゃべりかける。その表情には、人数的優位による余裕が見える。

「悪いがここはダンジョンだしな、大人しく荷物を貰おうか。恨むなら武器無しでダンジョンをうろついた口の不注意を……」

「悪いが」

不意に言葉を遮られ、剣士の顔が一瞬迷惑する。ゆっくりと息を吐き、腰を落とす。

「俺は既に武装してるんですけど

踏み込みと共に腰だめの右拳を突き出す。緩やかな捻りと共に直進。

「つー」

反射的に剣を横に降る剣士、激突する剣と拳。響くのは甲高い金属音。確実な、打ち碎く感覚。真上へ高速で飛び小さな影と火花。

「 なツ」

剣士がほおけた視線で俺の頭上を見る。

俺からは見えないが、大体想像はつく。折れて飛んだ剣先が、ダンジョンの天井に突き刺さったのだろう。

「ひツ」

剣士が息を漏らすより早く、練り上げた気を乗せた左拳を鳩尾へぶち込む。

割れた鎧の破片をこぼしながら、声も無く剣士が崩れ落ちた。これが俺の学んだ拳法流派、南州の八卦掌が一派、『双極拳』の基本防御の型。

練り上げた氣による外功で、一瞬の間腕の皮膚を強化、さらに通常は捻る回転により掴みや拳打を無効化するための防御技術『転肢剣』を用いることにより、剣をはじく。

いかなる剣も刃筋が立たねば物は切れない。さらに横流しに力を流し弾き飛ばす。慣れてくれば安物の剣程度、へし折ることも出来る。

うめき声一つ上げず倒れる剣士に戦士やオーク共が一步、足を引いた。

「す、素手で剣へし折りやがった……ツ！？」

倒れる剣士を足下に置き、残心を崩さず、一步、詰める。

「今更謝罪とかは入りませんよ、
もう遅いですからね、お
密さん」

精一杯の営業スマイルを浮かべ、俺は告げた。それでもう一仕事。

オーガと潜れりつ

「そんじや、覚悟はいースかね」

ゆっくりとした歩調で前へ出る。意を決したように急激に踏み込むオークのオッサンその一、手に持つ厚みのあるバトルアックスを垂直に振りかぶり、必死の形相。斧の峰に左の腕をピタリと重ねている。一撃に全筋力と体重をかけて叩き割る必殺の構え。

「フンッ！」

上下へ天地を裂くが如く一閃する刃、しかし軌道はどうに読めている。

上体をわずかに捻り、アックスが傍らを空ぶるのを確認。タイミングを合わせ、横薙ぎの裏拳をアックスの峰めがけて解き放つ。

ツ ゴ オ ン ！

巨人の骨をへし折るような激突音と共に、火花が刹那の内に咲いて散った。アックスが半ばからへし折れ、破片は向こう側の壁につかと食い込む。ここぞという時に安物は使うもんじゃないぞ。

「お、斧まで……ツ！？」

折れた斧を手に呻くオークへ、右の掌底を顎先へ掠るように撫で振るう。

「 つ

狙いはドンピシャ、いい感触。顎先へ伝わる衝撃がテ「」の原理で脳をシェイク。力無く、膝からオツサンが崩れ落ちた。

「二人め、と」

さあ一乗つてきたぞ、サクサクいこうか。

「う、うおおおッ！」

叫びながら槍を突き出す髭の戦士。俺は打突に合わせ拳を振り下ろす。拳に当たった槍の穂先が下方へ曲がり、生えるよつに床へ突き立つ。

「セイツ！」

脚を上げ、気合いと共に震脚を槍先と柄の接合部へ振り下ろす。ドンッという衝撃が走り、呆気なく刃が外れて床を跳ね、壁へ突き刺された。

震脚の一歩を起点に前へ踏み込み、戦士との距離を詰める。

「バケモノ……ッ！」

一步めの踏み込みで更に加速、戦士がなにやら失礼な事を言い終わるより早く、腰の回転動作からの肘鉄をこめかみへ叩き当てる。ぐらりと体が揺れた。無言のまま倒れる人間がもう一人追加。

「ほい三人目」

最後に残ったオークのオツサン　たしか昼飯代五百ギルの方

がアツクスを握りしめながら啞然とした表情で俺を見ている。そんなに見つめんなよ、穴があいたらどうする？。

「ちょ、ちょっと待つてくれ！　俺は別に奪つつもりはない、謝るからー。」

わたわたとした動作で武器を捨てる、こちらをなだめようと必死だ。これは一つ声をかけた方がいいだろうか。

「あのー、お客さん。大人しくしてもらえれば、こっちもありがたいんですけど、いいスか？」

「あ、ああ！ 大人しくする！ だから……」

ああ、こりや良かつた。

「ありがとうございます、お姉さん。いつも出来る限り」

卷之三

手早く一瞬で終わらせますから

ヒツ、ヒイイイイイイイツ――! ぐり

ほい四人めつと。謝つても遅いって言つたじやねーか。

「先輩、今の人たち、大丈夫なんですか……？」

後ろで俺を見下ろす巨漢、ダイムが呟く。お前その質問何度目だ。大体オッサンどもを置いてきた十五階は既に通り過ぎた後だ、忘れる。

「べーつに死にゃしねえよ。死んだほうがましだと思つぐらいぶん殴つただけだ」

黙々と歩を進める。現在十八階、目的地まであと少しだ。

「……顔から倒れてしまたけど、あれ明らかにヤバい倒れ方ですよね」

「あそこに適当に転がしどきや見回りのコボルトのオッチャンたちが回収すんだろ。余計な心配すんな」

一見無法地帯なダンジョンにも法はある。最低限の安全保障といふやつだ。ダンジョン内の殺人や障害は戦闘や事故ならば基本罪には問われない。ただし明らかな戦闘不能者を攻撃、死に至らしめることは違法だ。「誇り高き戦士の行いではないから」「ダンジョンは試練の場であり無益な殺戮の場ではないから」というのが理由とそれでいる。

そしてその安全保障の実質管理として整備員であるコボルトのオッチャンたちがいるわけだ。

基本業務はトラップ設置と戦闘不能者の搬送。完全中立で動くダンジョンの管理人たち、オッチャンたちの働きでダンジョンは最低限の安全を保っている。

最も、魔王軍所属の基本公務員扱いの魔族と違い、冒険者は搬送された病院で目玉が飛び出るほど高額の治療費を請求されるわけだ

が。

「それにしても先輩、ちょっとこれは参りましたね

立ち止まつたダイムがハンドアックス 雑用に使う小型の斧を一薙ぎ、鋭い悲鳴を上げながら影が後ろへ跳びすれる。発光機関に照らされる小さな影。子供ほどの背丈に灰色の毛並み、短い足と長い腕。

「ダンジョンに来たからこいつのは恒例だからな。ま、ひとつと追い払え」

もう一匹の影へ軽めの拳打を繰り出す。よけながら回じく下がる影。

歯を剥いて威嚇、潰れたカエルのような鳴き声を放つ。

『ゴブ・ハイプ』 ダンジョン内に生息する迷宮獣の一種だ。ダンジョン外のサルと似たような外見ながら、それをしのぐ筋力と敏捷性を持つ。ただ基本的には初心者や中級者向けの弱めの迷宮獣だ。

「数は二匹、群れからはぐれたヤツらか?」

ゴブ・ハイプは基本的には二十匹前後の群れで生きる。これしかいないなら「ハイツらははぐれの寄せ集まりだ。

「……そうでも無いですね」

斧を構えながらダイムは反論する。大柄なダイムが小型の斧を持つと玩具に見えてくるな。

「ゴブ・ハイプの群れからはぐれるのはリーダーに敗れた若いオスだけです。三匹中一匹がメス、しかも毛並みと体長から若い。ならばこれははぐれの寄せ集まりではなく、群れから迷子になつた個体だと思います」

普段の気弱な態度とは裏腹に、妙にきつぱりと断言する。つーか詳しいなダイム。

「あれ、お前そんなキャラだっけ？」

「僕の希望専攻学は『迷宮内生物学』ですよ。これぐらいいじつて当然です。それに学問は実践して初めて価値があるんですよ」

ダイムの胸が大きく膨らむ。鋭い吸気音、やがてその牙が覗く口から放たれる巨大な吠え声。

「キイ オオオオオオ ハハハツツツ！」

「つおつー！」

思わず耳をふさぐ。暴力のような空氣振動がダンジョンの壁んだ壁を殴打。鼓膜が痛い痛い痛い！

「なんだよ、ダイムッ！ 急に野生化しやがって」

吠え声がピタリと止む。落ち着いた様子でこじりて振り向くダイム。

「野生化したんじゃありませんよ、ゴブ・ハイプの警戒の吠え声の真似したんですね」

周りを見るとゴブ・エイプは一匹も見当たらない。逃げ去ったようだ。

「逃げてくれましたか、我ながら上手く真似出来た様ですね。生き物を傷つけるのは正直イヤですし」

勇猛と怪力が売りの鬼人族とは思えぬ発言をするダイム。

「……なあ、上手く真似出来たとかじゃなくて、単純にお前的大声に驚いただけじゃね？」

「ち、違いますよ！ ちゃんと真似出来たから逃げたんですよ！」

えー、怪しいなあ。

キャリアーを再び担ぎ直しながら、歩み始める。さすがに十五階以降は迷宮獣が増えてきた。

「しかし妙ですね」

「何がだ？」

強面の顔を傾げ、疑問を口に出すオーガ。

「さつきのゴブ・エイプや、その前の迷宮獣もそうでしたけど、このあたりの階層の迷宮獣は積極的に襲ってくるタイプじゃないんですよ」

人を頻繁に襲う迷宮獣はもっと下の階層に多い。このあたりは所

詮は初心者向けだ。しかし十六階を過ぎた辺りから結構襲われようになつた。まあ全部余裕で撃退したけど。

「所詮は動物だしなあ。腹が減りや人ぐらい襲うだろ?」

「それでももつと襲いやすい獲物はいるはずです。それにあの攻撃性は飢餓というよりは、何か危機感による不安からのような……全体的に気が立つてるとこつか」

「あんなサルだか力一だかの機嫌を気にして仕方ねえぞダイム」「いまさら迷宮獸の都合など考えても仕方ない。どうだらうがどつと荷物届けて帰るのがベストだ。

「……ちょっと待つて下さい、先輩」

「どうした

またも足を止めるダイム。じつと耳をすましている。

「なにか……人の、女性の声が聞こえませんか?」

「んん? ちょっとまてよ」

神経を耳に集中、ダンジョンの静寂に耳を傾ける。わずかに聞こえる高い、女性の声を連想させる音。しかも泣き声。

「……ダイム、こりや人か?」

「迷宮獸の中には人の声を出せる種類も存在します、ただこの階層

「はいないはずです」

人の声で呼び寄せる迷宮獣は攻撃性の高いタイプだ。

「ダンジョンで泣き入れる冒険者なんて聞いたことねえよな。といふことはやはり迷宮獣の類……」

「もし擬声のできる迷宮獣なら……しかも低階層……新種か?」

「頸に手を当てブシブシとつぶやき始めるダイム。おーい聞こえてつか?」

「先輩、あの声の方へ行つてみましょー!」

巨漢を声の方へ向け、進み始める。オイコラ待て。

「おい、冒険者を助ける義理は基本的ないんだぞ!」

ダンジョンを歩く以上、自分の身は自分で守るのは最低限の常識だ。

「もし、人ではなく迷宮獣なら、新種の可能性があります!」

振り返らず叫ぶダイムの声には熱気がこもっていた。

「もし新種だつたら学名に僕らの名前が載るかもしません。図鑑に名前が載るんですよ! これは探すべきですよ!」

「やつちのほうかよー!」

声の主が割と簡単に見つかった。

ひだのように異常形成された壁の隙間で、屈みこんでシクシク泣いていたのだ。

年は二十歳ほど、赤毛の髪に黒ローブ、宝玉のついた杖などちよつと時代遅れつまり中古の装備。少しそばかすのある顔には、泣きはらした赤い眼がある。見ての通り、人間だ。

「新種じゃ無かつたんだ……」

たんこぶをつくり、ガックリと肩を落としたダイムが呟く。……」「いつもなかなかアレな性格してんなあ。

「あ、ありがとうございます！　ありがとうございます！　わ、私はパートナーからばぐれちゃってどうしていいかわからなくて……もう本当に死ぬかと思つた……」

メリルと名乗る女性の新人冒険者、魔術師が泣きながら礼を言つ。最初に見つけたのが強面のダイム　しかも新種が発見出来ると浮かれていた　だつたため、半狂乱で杖をダイムに振り回していたのを俺が取り押さえ、なんとか落ち着かせたのだ。

「あ、あのお願いですから一緒に地上まで連れて行って下さい！　私一人じゃ無事に帰れません……」

あー、やっぱそうくるわな。

「悪いんだけどさあ、俺ら二十階まで用事あるから上いがんのよ。

あんたも冒険者ならその辺は自己責任で……」

「だったら一十階までついて行きますから連れて行ってトセー！お願いですかー！」

摔み倒すメリル。そりは言つてもなあ。

「先輩、 しようがないですからこには連れていくしかないんじゃないですか？ さすがに見捨てるわけには……」

彼女を見つけたダイムも口添えしてきた。 しょうがねえか。

「じゃあ、 あんたも一十階までいくか？ 地上に戻るのはその後だぞ」

「あつがとうござります、 ジムさん、 ダイムさん！ あの、 ところで皆さんの職業は一体……？」

メリルが不思議そうに俺とダイムの制服を見つめている。 まあ気になるわな。

「ああ、 十階にトリックドライヤーがあるんだが、 そこのお店員」

「…………パンペーー店員がダンジョンに？」

「弁当配達でもぐつてんだ」

メリルの目が一瞬点になる。 新人冒険者とはいって、 冒険者がコンビニ店員に助けられる現実は少々キツかったか。

「そ、そうですか……」

細い体をふらつかせるメリル。結構自信喪失したらしい。

「ところではぐれた仲間はどこいったんだ？ どつかであんたを探しているんじゃないかな？」

「はぐれた時に私はてっきり下に潜つたと思って進んでしまったんです。仲間の人たちはひょっとして上に戻つたのかもしれません……」

はぐれた時は上に戻るよう全員で決めとけよ。危なかつしいなあ。

「で、仲間ってどんなヤツなんだ？ 新人から田離すとは面倒見良きやしないな」

「いえ、新人の私も心よく迎えてくれたいい人たちなんですよ。ヨゼフさんとガットさん、ヨゼフさんは細身の剣士で、ガットさんはヒゲの似合つ槍を使う戦士で……」

…………あつ、やつべ。やつちまつた。

オーガと潜る4（前書き）

お待たせしました。

オーガと潜るウツ

舐めるように火炎が舞う。熱と光に炙られて、悲鳴を上げながらゴブ・エイプたちが逃げ惑つていく。

乱舞する火炎放射、魔法の中では初心者向けかつ使いやすい魔術「火炎放射撃」。

魔術によって生成された合成油を着火、高圧で吹き付ける魔術だ。威力はそこそこだが低い練度で扱える上、効果範囲が広いというありがたい代物である。

「あーはっはっはっ！ 燃えちゃえ、みいいんな燃えちゃえ！ あたしを怖がらせるゴブ・エイプなんて消し炭にしてやるつ！ イヒヒヒヒヒッ！」

炎に顔を照らされながら、やたら高いテンションで喋りまくるメリル。あれ、このねえちゃん戦闘中はこんななの？

「なんか、うかつに『ちょっとゴブ・エイプ追い払うの手伝って』なんて言つべきじゃなかつたかな……」

引き気味の表情で呟くダイム。また襲ってきた迷宮獣を追い払うの手伝わせたら、一いつなつてしまつた。どうしてこうなつた。

「迷宮獣なんてみんな燃やしてやる！ 私が隠れてた時に不気味な吠え声でイジメてくる迷宮獣なんてみんな燃やしてやるうううううツ！」

あ、その吠え声はたぶんダイムだ。もうすでに迷宮獣が逃げたのに、メリルの火炎放射は止まらない。……おい、これじゃすぐ魔力

なぜかね？

「と、とつあえずじめましょ」つよ先輩。このままじやまあこですつて

えー近寄りたくないなあ。

「しゃあねえな。おーいメリル！ もう止めろ！」

「死んじゃえ！ 私をイジメるヤツはみんな死んじゃえええッ！ アハハハハッ！」

……ちひこと同行すんのやだなあ。

「ほんとすいませんでした！ もう私一人じやどうなことかと…」

…

ペコペコと頭を下げるメリル、動く度に赤毛が揺れる。ダイムになだめられてようやく落ち着きを取り戻したようだ。……虚ろな目で「ホントに？ ホントに私をイジメるヤツはもういないの？」といいだした時は本当にその場に置いていきたくなつたぞ。

「あ、ああ、まあほりひこう時は助け合いつつていうしや、そ、そうだよなダイム？」

「え？ ま、まあそりですよね先輩。困った時は助け合わないと…

…

やつぱアレだよな。メリルの同行者つてこの前の二人組……めんぢくせい」とになつたなあ。

「でもあの一人はダイムさんもジムさんも見てないんですね？狂暴な迷宮獸に襲われてなければいいんですけど……」

「狂暴という意味では当たつて……あ痛！」
わき腹にこいつそり肘を入れて牽制、黙れダイム。

「え、なにか一人のこと知つてるんですか？　途中で会つたとか」

「いやー悪いが全ツ然、心当たり無いわー。悪いねー」

これ以上めんどくさくなつてたまるかボケ。

「……先輩、やつぱり正直にこいつたほうがいいんじや……」

ダイムがメリルに聞こえないよう小声で耳打ちしてくる。

「……たしかあと一時間ぐらいでアイツらが倒れている地点にコボルトのおっさんたちが見回りにくるから、怪我人回収されるのを待てば」コチャコチャ面倒くさい説明しなくてすむだる

腕時計で時刻を確認、行つて戻つてくる頃には片付けられてんだ

る。

地図を確認、現在十九階。丁度手前に下行きの階段が見えてきた。
とつとと荷物届けて帰りたい。

「しかしめんどうでいいな。魔王城で管理している非常口を使えりや
一発なのに」

魔王城から地下ダンジョンへは、通常の探索ルートの他に各階層をダイレクトにつなぐ非常口^{ハレベーター}がある。

元々はアウトフロントの建造物を基本はそのまま使用しているわけで、現在の管理者の魔王国がそのアウトフロントの移動装置を管理している。

最も使えるのは魔王軍所属の魔族だけ。一般的な冒険者は余程の大金を積まないと使えない。

デッドラインは店内の非常口のみ通勤目的で使用することを許可されている。

超最下層の辺りだと、その非常口さえ繋がつてないらしいが。

「魔王城の事務所から出口出なかつたそいつですからねえ。やはり地道に歩いていくしかないみたいですよ」

階段に足を踏み入れる。螺旋階段を回りながら、使えない物を期待しても仕方ないと自分に言い聞かせた。

「なんか不公平な気がするんですねー。私たち冒険者のほとんどは必死に階段上り下りしてダンジョン探索してるのに、魔族はエスカレーターでひとつ飛びなんですよ」

不満を口にしながらも、ロープの端を踏まぬよう慎重に降りるメリル。それでもバランスを崩しかける。なんか見てらんねえなこのねえちゃん。

「基本成功の成果は総取りの自由業の冒険者。給料制だが福利厚生のある魔王軍公務員の魔族。そういう違いなんだろ。あんまり冒険

者を密扱いし過ぎてもダンジョン経営にいくんじやね

現在のダンジョンに資源採掘場所としての価値は並程度だ。レアな素材は手に入るが量が少なく、鉄の原料の鉄鉱石、アルミニの原料のボーキサイトなど工業を支える採掘資源は他の鉱山から大量に取れる。

冒険者や魔族の成績をポイント制にして酒場などで国営の賭け場であるトトカルチョ、「ダンジョンアンド『ディ』」通称D&Dを開催。なかなか大きな収益を上げている。

このため上位の冒険者は街ではなかなかの人気者だ。

「そりや そうですけど、それでも納得いかないっていうか…… はあ、憧れの上位冒険者なつてみたいなあ^{ハイランカ}」

若いのだから夢を持つのは結構だが、まずはあの半狂乱で魔術を連射する癖を治したほうがいいと思つ。いやマジで。

「それにしてまづいぶん長いな」この階段。普通より五、六倍はあるぞ

正直ダンジョンはそれほど深く潜つた経験は無い。二十階に行くのも今回が初めてだ。

「あー、私も無いんですよ。今まで十五階あたりでウロウロしてたんで

「僕は昔父さんに連れられて二十階までいった事あるんですけど

ダイムがしみじみと昔を振り返つていた。

「なんか二十階ってやたら天井高いんですね。一十五メートルくらいあるんですよ」

「なんでそんな高いんだよ?」

「それがよくわからないんですよ。建造物の構造体が異常増殖してるものですから、急に造りが小さかつたり大きかつたりするなんてよくあることですし」

「シリシリと足音が狭い空間に響く。下のほうに明かりが見えてきた、そもそも階段も終わりらしい。

到達した二十階はまたしても壁が乱立する場所だった。半ば迷路になりかけているが一応は階層の中心を手探して突き進む。

「しっかり間に詰やがるんだサイトーつて?」

「冒険者か魔族のじつちかなはずなんんですけど、さつきから全然誰とも会わないですね先輩」

「私も早く終わらせて帰りたいです……」

杖をプラプラと振りながら氣怠げに呟くメリル。おい、こいつだんだん態度テカくなってきたぞ。

「そういえば思い出したんですけど……」

「なんだダイム?」

「迷宮獣がやたら氣が立つてるって話しだじやないですか、それでその原因をたしか前に本で読んでたんですよ」

「今さらそんなん聞いてもなあ」

壁を曲がると更にそびえる壁、壁、壁。氣が滅入つてくる。ダイムは俺のぼやきを無視して話を続けた。

「大体は原因是一つなんですよ。下級迷宮獣にとつての脅威がその階層、または近くに現れた場合。下級迷宮獣はそのために逃避や警戒を強めているんです」

オオオオオオオ……

何か、呼吸音のような音が遠くから聞こえてくる気がする。

「……その脅威つてのは、例えばなにならんんだ?」

「そつですね、例えば……」

「あ、なんか大きい広場に出れましたよ! でもやっぱりだれもいない……あ」

先行していたメリル、壁を曲がった途端に言葉が消えた。なにか嫌な予感がしつつも俺も壁を曲がる。急に開けた、高い天井の田立つ空間にそれはいた。

朝焼けのような色の外皮は火山岩を常食すことにより、重金属を含む強固な鎧と化す。

その頭部は、鋭い三角錐のシリエットを持つ。突き出た乱杭の牙と後ろへ長く伸びる一対の角は、凶暴さと攻撃性を強く見る者に植え付けた。

背中に生える「ウモリ」のような羽は、今は畳まれて慎ましく見えるが、広げれば体格の三、四倍の面積に匹敵するだろう。

強靭かつ太ましい四肢には、鋭く長い爪が並ぶ。

そして最も特筆すべきはその巨大さ。尾から頭までは三十メートルを超える。恐らく立てば一十メートル近くまでいくだろう。

それは迷宮の王。理不尽なほどの力の代表者。あらゆる冒険者が恐れ、崇め、憧れる存在。

「……おい、例えば、なんだって？」

メリルと同じように言葉が途切れたダイムへもう一度話かける。それでも彼の視線はそれに繋げられたまま動かない。代わりに、まるで熱病にうなされるように唇が動く。

「……体長をリッケンベル竜成長測定年齢換算方で当てはめると千二十九歳級、竜種は恐らくレッドドラゴン……」「ぐりと瞳を呑み込んだ。

「^{スルト}通称火神竜と呼ばれるタイプ。年齢的にも超最下級にいるべき最上位迷宮獣です……」

さて、給料に合わない仕事になってきたぞ。

オーガと潜るひづ

地響きを立て竜が振り向く。生物種最強の種族が、赤の瞳で俺たちを見据えた。そして口腔から、空気振動が放たれる。

「あ、ひょっとしてデッドラインさん？ サイトーッて僕です。よかつたあー、遅かったから心配してたんですよ。ところで判子忘れちゃったんでサインでいいですか？」

「龄千年を超えると思えぬ好青年な口調で火神竜は明るく声をかける。
「スルト

「ビーもー、まこビデッドラインです。」利用ありがとうございます！

サインをもらい、荷物を渡す。仕事が無事に終わった後は気分がいいなあ。

「早く帰らうぜ、ダイム。後でコーヒーでもおひこてやるから」「え、いいんですか？ ありがとうございます！」

「あ、私もいいですか？」

「はつはつはつ、ほんと遠慮しないねえちゃんだな。ま、いいか

笑いながら出口を田指す。さあ早く家に帰つて寝よう。

……ぱー。

そうか、仕事は終わつたんだ。竜はもういない。

……んぱい。

もうあのアホ店長も竜もない俺の部屋で思つ存分寝てやるぞ、わーい。

「現実逃避はやめてくださいよ先輩！」

ダイムの顔面凶器を見て、俺は現実に引き戻された。

「気持ちはわかりますが、現実から逃げないで下さいよ！」

「うるせーな。わかつてるとダイム！」

現状確認。眼前の広場には伏せている火神竜^{スルト}＝三匹いれば小国を落とせる戦力。

味方戦力。ヘタレオーガ×1、根性ねじれへぼ魔術師×1、俺×

1。
結果予測。絶望の極みウルトラブーストはいきたグーン、さらに倍プリシュー！

やああつてえられるかッ！

「とりあえず、サイトーが見つかん以上退くぞ！」

「ちよつと待つて下さい、火神竜を間近で見るなんてめつたにない

んですよー。もひりなつと……」

「もひじやああー。なんで二十階の低階層にあんなどないのいるんですかー!?

この期におよんで、学術的興味を優先するダイム。マッハで取り乱すメリル。

こいつらまったくパーティとして機能する気が無い!

「どうあえず、まだ竜が気づいてない内にこはは遁って……おこメリル騒ぐな! 気づかれるだろ」

「あー、先輩、それはもう遅いです」

騒ぐメリルを後日に、淡々とするダイム。

「……なんだつて?」

「あのレベルの竜は、高精度の探知索敵魔術が常に発動していますから。僕らなんかより探知能力は高いです」

竜の頭部、眼の周辺に光の線が走る。間違いなく探知魔術が作動していた。

「僕らが竜を見ているといふことは、十中八九、竜もひりに気づいているでしょ?」

でしょう、じゃねえよッ!

オ オ オ オ オ オ オ オ オ ……

竜の遠吠えが唸る。地響きを上げながら、足がこちらへと動いていく。確實にこっちに氣づいてるぞ！

「ちよ、じつち氣づいたみたいですよジムさん！」

「見りやわかるよメリル！」

身を翻し、大急ぎで壁の裏へ退避。竜から逃げなければ。

「あ、ちよつと」

竜へ振り返るダイム。なんだ？　なにする氣だ？

「あのー、サイトーさんてあなたですか！」

「」の後に及んでお前は何を！

しかし、ダイムの言葉に、ピタリと竜が停止。

……えつ、ひょつとしてまじで？

甘い考えが頭をよぎった次の瞬間、竜の口腔が赤く瞬ぐ。

ヒ ュ ゴ ゴ ッ ！ ！

赤火の渦が竜の頭の近くで揺らめいた。明らかな威嚇のための火炎放射魔術
アイヤフレス

「」のバカ！」

「ダイムの襟首を掴んで壁裏へ引きずり込む。肝冷やせんじゃねえアホ！」

壁裏で座り込む。焦りで息が乱れた。いくらなんでもそれはないわな。

「アレがサイトーなわけないだろ！」

「ひょっとしたらと思つたんですけどねえ。やっぱ見つからないしもしかしたらと」

「もしいたとしても消し炭になつて転がつてゐるか、竜の腹ん中だろ」

「いやああー やっぱりみんなここで死ぬんだー！」

だから落ち着けヘボ魔術師。あと杖振り回すな。

騒ぐ彼女を尻目に、竜の行動から推測する。

「まあどうも竜には焼く氣は無いみたいだな、やる気ならとひく『^{ナバーム・フレス}超焼炎息吹ぐら』後ろから撃つてるだろ」

竜の魔術の代名詞、^{フレス}息吹魔砲。

息吹、というか口腔から魔術を撃つわけだが、竜の体格と合わせ首の稼働域によりかなり広範囲に撃てる魔術だ。それゆえに回避は難しく専用の防御策が必要になる。狭いダンジョンでは致命的な攻撃だ。

埃を払いながら立ち上がったダイムが賛同する。

「そうですね、千歳越えの火神竜なら最悪、^{ティルト・ウェイ特・フレス}核爆衝撃極炎息吹ぐら

い撃てるでしょ「うし……とこ「う」とは」

ティルト・ウェイト・ブレス、戦場で魔術師四十人がかりで発動したのを一回だけ見たことがある。魔術により限定空間を作り出し、内部で核爆発を発生、熱と衝撃のみをこちら側へ召喚する戦術級魔術。

十数万度の熱と超衝撃を持つが、そんなもんダンジョンで撃つたら竜も生き埋めになるだろう。

「それでも追っかけてくることは……丸焼きより踊り食いが好み、か」

「でしょうね」

「もういやあああ！ 竜に食べられるのも丸焼きもいやああ！」

だから落ち着けヘボ魔術……

ド オ ン

「ひつ！」

突如、向こう側から衝撃。壁にヒビが入る。中央から、放射状に走る亀裂。

メリルの取り乱しが収まり、悲鳴を上げたままの表情でフリーズ。

「……追ってきてやがるな

ド オ ン

再度衝撃、地響きに足がすべく。亀裂が深く広がる。冒険者ならまず避けることが常識の壁も、竜にはただの簡単な破壊対象でしかない。「これが竜か。

「お、おお応戦、応戦しないことと」

震える声で杖を握るメリル。すでに田の焦点が合っていない。

「メリルさん、火神竜にはマグマの中を泳いでいたという報告があります。それほどの熱耐性を持つ以上、メリルさんの魔術では対抗はとても……」

「うわあ、火神竜ってやっぱスゲエなあ。なんか絶望的過ぎてなんも感じなくなってきたぞ。」

「しょうがねえな、ダイム、荷物降ろしてこの場に置いてけ。そんでメリル坦いで入り口まで走れ。俺が時間を稼ぐ」

ダイムがギヨツとした顔で俺を見る。メリルはまだ言葉の意味が理解できないようだ。

三度めの衝撃が壁に響く。その音に、黙っていた二人がハツと我を取り戻した。

「先輩、稼ぐつて……じつやつて！？ いくらなんでも相手は竜ですよ」

「なんとなく思つてたけど……このジムをさつてやっぱじこかおかしい」

やかましいわ。

「逃げてる途中で火を吹かれたらどうの道終わり、時間稼ぎは必要だ。たまには年上な所見せてやうじとな。心配すんな、適当なあたりで切り上げるさ」

ブレスを控えているなら、接近は出来る。腕と脚が届く距離なら、俺の得意分野。

ただし、チャンスは一回限り。仕留めきれず一度目に距離を取られたらブレスがくる。

「ダイム、なんでもいいからヒヒヒヒメリル上げ！ そのまま出口まで振り向かず走れ！」

「いくへりジムせんでも……」

ダイムに浮かぶ逡巡、自分でかなりマトモではないことを言つてこいるのは理解してこむ。

「なあに、俺が給料以上の仕事しないやつなのは知つてんだひ？ こんな安い仕事で死ねるか？」

そうだ、死ぬには合わない時給だ。あのクソ店長に文句も言わずに死ねるかよ。

意を決し、ダイムがメリルの腰を掴む。

「え、え、ちょっと」

無言のまま、勢いよく肩にメリルを抱き上げ、後ろへ振り向く。

「絶対、助けを呼んできますからー！」

そのまま、脱兎の勢いで走り出した。草食系な気質だが、やはり
オーガだ。脚が速い。

たあて、

眼前の壁に向き直る。響く轟音、更に深く鋭く隆起する亀裂。はつきりと感じる、この壁越しに強大な霸者がいる存在感、そして壁が意味をなさなくなっているという予感。壁が破れるまで、恐らくあと一撃。それだけが見敵までの猶予。

永いな。

時間が引き延ばされる。戦闘へ己の精神を切り替えることで、時間感覚が伸びる独特の感覚。本来なら僅かな間であろう最後の一撃への時間が、永い。

ゴ

ゆっくりと中心が崩れる。吹き飛ぶ中心から向こう側が見えた。

オ

破壊の衝撃が広がる。円状に走る破壊。柔らかく舞い上がる破片。

ン

そして、赤火をまといて現れる火神童。

ツツツ――!

竜は吠えていた、と思う。吠え声を理解するよりも先に、弾ける
ように突撃。降り注ぐ破片を避けながら、拳の届く距離に竜を捉え
るまで、ひたすらに前へ。

「ツー？」

不意に頭上を飛び越える光球。一直線の弾道で、竜の頭部に突き
刺さる。

メリルか！？

担がれながら放たれた照明魔法の一種、いきなりの目潰しに竜が
巨体をきしませのけぞった。遠ざかっていく彼女の声が聞こえた。

「死ね、死に腐れこのバケモノトカゲエエ！」

ねえちゃん、意外とやるな。

オーガと潜れりゅう（後書き）

試験的次回予告③

「ハァイ、というわけでなんだかお久しぶりでス。『ダンジョンコンビニ』裏の裏の裏の裏の主役の店長でス！」

「……おこそれ結局表だよな？」

「そしてこちらは店長の愛人兼店員のジム君ー もちろんシッコウ役には『夜の』という意味も含まれ……」

「死ねボケ殺すぞ」

「さて挨拶はいじめテ。ここからが本題です『ジム君！ え當い業おお戦略うううう ッ！（棒）』

「今度はそのネタか、ていうか（棒）まで発音するんじゃねえよー。」

「きっと、何者にもなれないジム君に告げル。
売上を三倍にしテー！」

「いや何者っていうか俺コンビニ店員だから、それ以前にリアルな無茶をいふなー。」

「……ふと思つたんですが、あれって例の日記帳じゃなくて未来日記のほうの日記渡したらどうなるんですかネ？」

「無謀なクロスオーバーはお前の脳内だけに留めろ。」

「まあそれはそれとしト、近頃なりうでは迷宮がブームですよネ」

「またメタな事話し出すなお前。てこつかそのブームもひ遲いよ」

「セレードですね、そつこつた作品のダンジョンを無断で間借りしト、チーン店を開いて店舗増産、売上アップ計画を……」

「止めるよー。絶対止めるよー。お前やれやつたら色々な所から洒落にならんほど怒られるからなー。」

「まあセレードは冗談ですヨ。なにか良く売れそうな商品でも並べますかネ。」

魔王さん向けにヨレ本強化したりとか、あ、薬品カテ「コーヒー」だけどある薬品とある薬品を混ぜると爆弾になる商品とかどうじょウ? 扱いは武器じゃないから売れますヨー。」

「……また魔王さんに怒鳴りますよ? てこつか、さつきから氣になつてゐるんですけど、その小脇に抱えてるペンギンのぬごぐるみなんすか?」

「え、やだなあジム君。さつきまでの会話ネタからわかるでしょ? 今一番ホットなペンギンキャラクター、その名もブリー!……」

「わつ黙れお前ええー。」

オーガと潜れり。

この好機、逃すかよ！

目潰しに一瞬、いや刹那に怯む竜。それでも十分。頭上から落ちる巨大な壁の破片を避け、出来る限り直線ルートを跳ねるように駆け抜ける。

内功によつて強化された脚力で床を蹴り、降り注ぐ破片を見切りで流す。立ち止まる訳にはいかない。

「チイツ！」

眼前に巨大破片、避けられないコース。

とつさに気を練る。腰だめに構えた左拳に外功を込めた。

「オオオツ！」

速度を落とさず、

拳を解き放つ、狙うは崩壊の中心点。

狙いが当たつたことを感触が知らせた。

拳に走る衝撃が通つた手応え。同時に、巨大破片がバラけるように崩壊、前が開く。

よしつ！

突如、前方に轟風。

表面を覆う外皮により、しなる岩の柱としか表現できない竜の尾、それが地面全体を雑払うように振られる。見えない以上、広範囲で止める氣か。

地をこすりながら振られる長さ一メートル以上、直径約二メートルの尾はまさに動く壁だ。

「くそつたれええつ！」

必死に跳躍、尾の壁を飛び越える。足のすぐ下で、竜の超硬度の外皮が通り過ぎていく。まとも当たれば即死だ。

向こう側に着地、受け身を取りながら転がる。床に落ちている破片で制服がズタズタに切れた。

転がりながら立ち上がり再び疾走。止まれば死ぬ。

到着したのは竜の真下。見上げる程に巨大な直立した竜、しかし悠長に眺めるヒマは無い。

格闘術、武術においてあらゆる基本は対人戦とりわけ対武術士に重きを置くことにある。

拳と脚が届く限りオーガなどの強壯な亜人種はもちろん、中位迷宮獣など人のカテゴリーから外れた存在も、極めた武術士ならばさほどの脅威ではない。

武術士にとつて最も脅威なのは手の内を読まれる同じ武術士だ。

それにより、歩法やコンビネーションなどのいかに武技を読ませないかの対武術士用技術が発達、根幹を成していく。

しかし、かつていた究極の実戦である戦場で、武術の定石が通用しないことを俺は知った。

戦場に入り乱れる上位迷宮獣や高位魔術師、超技量を誇る剣士達には下手な技法は通用しない。必要なのは、圧倒する破壊力。

乱戦を短時間で制し、防御を撃ち抜く力が柱となる。

どちらが上ではなく、対武術士と戦場では戦いと闘いの違い、方法自体が違うのだ。

故に、俺の取るべき方法はすでに決まっている。

身体内部より発生する気を、気の道である気脈より流す。体内で溶けた鉛が走る感覚。行き先は左脚。最大で外功を発生。

砕けんなよ、俺の脚！

地を貫くように蹴り上げ、宙を舞う。狙いは竜の左脚、逆関節構造のうち、人体でいう足の甲の部分。

その中心目掛け、全力の蹴りを放つ。

拳動の瞬間、一瞬粘りを感じる。だがそれはすぐに突破、加速する足先が伸びる。

同時に発生する衝撃と、一拍遅れる音。脚速が音速を超えた証。蹴りが入る。ビシリ、と竜の脚、その鱗に亀裂が走った。確実に剣力が入った感触。

まだだ、

その感触を楽しむより早く、反作用を利用し、反対側へ跳ぶ。気を右脚へ込めた。再び鉛が氣脈を流れる。狙いは竜の右脚。

「ひれ伏せよおおッ、トカゲエエエツッ！！」

喉から声を絞り出す。矮小な人の身で、強大な竜と対峙するための精一杯の、そして最大の虚勢。

二度めの蹴りも中心へヒット、空中では踏み込みが不十分なため一度目より威力は劣るが、感触からダメージはあつたはず。

「オ オ オ オ オ オ オ ……」

ぐらりと竜の体勢が揺れる。上体が落ち、派手な地響きと砂埃を

巻き上げ両腕を地に伏せた。

膝をつき四つん這いのポーズを取る竜、俺は即座に体の下から飛び出る。

目指すは右脚、竜が回復するより早く跳躍。岩のような肌を氣功で強化した脚力で踏みしめながら、駆け上がる。

俺が狙うのは数少ない人と竜の共通点、脊椎動物共通の急所。頭蓋と脊椎のつなぎ皿である後頭部のぼんの窪だ。

そこを全力でド突き回す！

脚を駆け上り、竜の背中、腰裏に到達した刹那。

「うおっ！」

見覚えのある岩の柱、しなりながら振り回される竜の尾が俺のいる脚の周りを払う。

とつさに手を離し、落下。空中で体勢を整えながら着地に備えた。

「ツー！」

足先から膝、腰へと衝撃を分散、受け身を取りながら一回転して着地。氣功で身体強化しても不意の落下はやはりキツい。

見上げる竜は上体を既に起こしていた。

両脚に光る蒼い燐光、竜の治療魔術により先ほどのダメージは全くの無駄になる。チクショウ。

「チツ」

後ろへ跳躍、踏み潰されぬように竜と一定の距離を取る。

竜がまだプレスを使わないことに賭けるしかない。

巨竜と正面から向き合つ。烈火を宿す両眼が俺を見下ろしていた。取るに足らぬ虫けらか、存外に苦戦する小兵か、どちらにせよ竜に引く気はないらしい。

先ほどの壁越しに向き合つた時とは段違いの威圧感と存在感。本来ならば専用の竜狩士が一百人程でチームを組み、それでやつと五百才級に勝率三割を確保出来るのだ。俺のやつてことは、もはや冗談どころかギャグにさえならない無謀だ。

それでも、それでもなあ、

限界まで息を吐き、大きく息を吸い込む。息吹と呼ばれる戦闘用の呼吸方で無理やり息を整える。

右脚を持ち上げ、渾身の力を込めて振り下ろす。

「 鋭ツ！！」

ズンツという振動、震脚による衝撃が床を貫く。

「 ビビッてんのか！？ そのナリは飾りかよオオトカゲ！」

正直、竜に人の言語が解るなど知ったことではない。だが高い知能を持つ竜ならば、挑発を理解しているはず。

「 オ オ オ オ オ ッ！」

竜が吠える。頭上から、斜めの軌道で右腕が落下。爪先が地をこすり、火花を散らしながら俺へ向かう。

「 フツ！」

真上へ跳ぶ。地面をなぐ竜の爪、通り過ぎる死の斬撃。

やつべー

直後、跳躍による回避を後悔。空中にいる無防備な俺を、今度は竜の左手が狙っていた。

まめよー

眼前へ迫る爪を咄嗟に蹴りつけた。目前を通り過ぎる爪、反動で体がスピン、そのまま落下。

「お、おおおお　　ツ！？」

なんとか受け身をとつつつ着地に成功。

あ、奇跡だ……

感慨に浸る暇も無く、地響きと共に竜が足を一步踏み出す。そして一歩めと共に踏み込み、再び右爪を振り下ろそうとした次の瞬間、

竜の足元が崩壊した。

「オ、オ　オ　オ　オ　オ　オ　　ツ！？」

ひょっとしたら疑問系で叫んでいるかもしれない竜。その両脚が瞬く間に床に開いた穴に飲み込まれる。

巨大物体の落下と床の一部崩壊により巻き起こる破片と埃を含ん

だ風。轟風が過ぎ去った後には下半身を丸々床にめり込ませ、両手で床を掴む火神竜がいた。

引っかかったなバカトカゲ！

ダンジョンの床は階層という空間を挟んだ積層構造上、余り厚くない。強度は床の材質頼みだ。

先ほどの震脚は単に竜に対する威嚇や景気付けではない。床を破壊するための一撃だ。

もちろん、俺の攻撃で床を破ることは難しい。しかしそこへ竜の体重を加えられれば？

落とし穴になるかはギリギリだったが、震脚の足応えから床にそれなりのダメージが通った事はわかつた。後はそこへ出来るだけ勢いよく竜を誘導するだけだ。

竜が混乱しているうちにブレスを吐かれないと距離を詰める、狙いは右腕からのルート。

跳躍と共に右腕へ飛び乗る。そのまま肩へと駆け上がった。

吠え声と共に左爪が迫る。しかし紙一重で俺の後ろに届かない。爪よりも速く、首筋へとりついた。

生きているなら、竜にだつてあるはずだ……

必死に目を凝らす。生物に置ける構造的急所、そこは氣の通り道である氣脈の中樞区もある場合が多い。

氣功を習つた者なら、氣脈を見ることが出来る。逆に言えば、より正確な急所の位置が見えるのだ。

竜の体から透けて見える赤色の光の道、神々しいまでの力強い生命の脈動。そして、

「いいつか！」

糸玉のように、赤光が大きく絡まる地点がある。場所は竜の後頭部の下。おそらくはこれが。

右腕に、渾身の剣力を込める。外功を最大で発動、腕の気脈が蒼白い剣力の光で浮き出る。爪の間から血が滴り落ちていく。俺が放てる中で、最大の、そして乾坤一擲の一撃。これを確実に、急所へ通す！

「 貫けえええええええツ！…」

肩、肘、手首へと力が伝わる。緩やかに、しかし力強く、螺旋の軌道で走る拳が竜の首へとぶち当たる。込められた全ての力が、水を吸い込む乾いた布のように竜へ入つていいく。

通つ……

文字通り乾坤一擲の一撃、その手応えは、

……らしいッ！

ハズレだつた。

急激に振られる竜の首、それに巻き込まれ振り落とされる。

「うおおーー！」

全力を使い果たした虚脱状態のため、ろくに受け身も取れず床に落ちる。

左手で上体を上げ、竜を見上げる。右手はしばらく使い物になら

ない。竜とはいえ、まさか外すとは勘が鈍つたのにも程がある。
それとも、ここが俺に相応しい死に場所とでもいうのか。

「ち、くしょ……」

力が入らない喉を絞り、悪態をつぶ。ダイムのやつは一体どこまで逃げた……

「こつてええええええツ……」

「……はつ？」

竜は、両手で後頭部を抑えていた。両眼にはつむらと涙が浮かぶ。そして何より、その声は初老の男性を思い起させる……

「喋ったあああああツ！？」

108

「うわナ」「レ！？ 痛すぎじゃん、……あ、喋っちゃった。兄ちゃん、今の無し、聞かなかつたことにして」

「なるか……」

なんだ？ なんだこれ、なんかすぐ一もくない結末になりそうなんだけど……

「あらあら、あなた何やつてるんですか？ ダメですよ配達の人には迷惑かけちゃ」

いきなり後ろから響く声。それはダンジョンに余りにも場違いな老女の声だった。

「なつ……」

振り向いた瞬間、言葉を失う。

溶岩石の肌、強壮なる四肢、痛がっていた竜よりやや小型の火神竜がもう一体、立っていた。

「……先輩、すみません。捕まりました」

「もういやあああ！ ウチ帰りたいい！」

そして、その両の爪先に掘まれているダイムとメリル。
……あれ、これ詰んだ？

オーガと潜れりつへ《ラスト》

「本んつ当おおおおに、すいませんツした ツ！」

土下座、ただ全力で土下座。額をつけた絨毯はほんのり暖かかった。
……あれ、これ床暖房？

竜一體に連れてこられたのはダンジョン二十階層、つまり先ほど
ド突き合いでした階層の隠し部屋だった。

「ちよつと待つとつてな兄ちゃん。えーと……お、あつたあつた。
ほいっと」

ダンジョンの壁際に立つと老紳士の声の竜がどこからともなく取
り出したりモコンらしきものを起動、即座に壁が割れ、スライドし
て開いた。……自動ドアらしい。

招かれた空間は、血と闘争の戦場たるダンジョンとは一線を譲ず、
穏やかな部屋だった。

きめ細かい上等のレンガ、炎がはぜる暖炉には鉄鍋に入ったシチ
ュー、緩やかな時間の流れる屋敷の一室といった風情。

ただし、全てが身長一メートルの竜サイズだが。

「あらあら、そんな」としなくていいんですよ、元はと言えば主
人が悪いんですから」

「口口口としたのんびり口調の老淑女の声が聞こえる。もう片方の竜、 というか奥さんの方 がこちらに首を伸ばした。

「まーあれじやの。ワシも大人げなかつたし、ほれ、^{じゅうべ}頭上げてくれんかの？ な？」

俺の眼前には、つい先ほど死闘を繰り広げた竜、つまり旦那の方 が腹ばいに伏せている。後頭部首筋にはこれまた竜サイズの特大氷嚢を当てていた。

結論から言つと、やはり竜はサイトーだつた。というか夫妻だつた。……なんかおかしいとは思つたんだよ、ブレス吐かないしなんか攻撃手抜いてるぽかったし。

「私達夫婦はずつとこのダンジョンの部屋で隠居してましてねえ、ほら久しぶりに知つてる人以外で人がいるつて珍しくて。そしたらうちの人が『迎えに行つてくる』つて聞かないんですよ」

奥さんの方の竜が旦那をあきれ氣味に見つめた。

「この人もういい年なのにまだ子供っぽいんですよ。大方一つ驚かそうとして吠えたり火吹いたりしてたんでしょうけど……それでこうなつてるんですから、自業自得ですよ、あなた。そこのお兄さんたちもごめんなさいねえ、怖い思いさせてしまつて申し訳ないわあ」

穏やかな声で謝罪する老淑女。旦那の方は決まりの悪そうな顔をしていた。どうやら力関係は奥さんく旦那らしい。

「いえいえこちらこそ先輩が飛んだご無礼を……あ、このカツプケ

一キおいしいですね」

「それにしても」の紅茶いい茶葉使つてますね！ おかわりいいですか？」

「いらっしゃる……！」

土下座する俺の後ろで響く声。ゆっくりと立ち上がり、声の方向へ振り向く。ああ、血管切れそつ。

「……お前ら、何のんびり茶しばいてんだよー。」

何もかも巨大な竜の部屋、その中で唯一の人間サイズのテーブルと椅子。

そこに腰掛ける、オーガと魔術師。

「え、いやほら、おもてなしはキチント受けないと失礼じゃないですか、先輩」

「わつですよー！」わつのは感謝して頂かないと……あ、ありがとうござこます！」

「喜んでもらつて嬉しいわあ、久しぶりのお客さんだから茶葉奮発したのよ。カツプケーキもたくさん焼いてるからどんどん食べてちようだいね」

巨大な爪の先でティーポッドからメリルへ茶を注ぐ奥さん。カツプケーキもキッチンと人間サイズなんだが、器用なもんだなおい。

「調子乗つてたワシも悪いとは思つんじやがのう、正直まさか素手

の人間が竜に殴りかかってくるのは思わんかったからなあ。常識的に考えて」

「やうですね。いくら先輩でも竜に素手で殴りかかることはしないと思つたんですが。常識的に考えて」

「やっぱジムをさつてどじか常識外れですよ。常識的に考えて」

「ぬかこいつの。

「しかし、まさかダンジョンに住んでいるとは俺も思いませんでしたよ。こんな快適な部屋まで作つてるなんて」

「生息、ではない。まさしく居住。まさか文化的かつ文明的な生活をドラゴンが営んでいるとは思わなかつた。自動ドアと床暖房まで完備しているとは俺のアパートより遙かに良い部屋だ。……ダンジョンって住めたんだなあ。

「ワシは元々魔王軍の軍属でなあ、ちゃんと住民登録までしてあるぞ。退役後に『どこか静かな場所で隠居したい』といつたら、知り合つにここを紹介してもらつたんじやよ」

「退職金でリフォームして、恩給でのんびり暮らしてるので。たまに知り合いの娘さんが来てくれるんだけど、それ以外の人は全然来なくてねえ」

「最近ダンジョンに『ンビニ』というものが出来たから、一つ人に化けて行つてみよつと思つたんじやが……あんま長い事使ってなかつたから人化の術忘れてての」

「忘れてるのはあなただけですよ。じゃあ私だけが人に化けて買いつくていいたら『自分も行きたい』つて駄々こねはじめるんですから。

「コンビニさん連絡したら店長さんが配達してくれるっていつからお願いしたんですよ」

最初はとんでもない見た目とダイムの解説に面食らつたが、基本的にお茶田なだけの仲のいい夫婦のようだ。

「ああ、ほれ、なんじゃつけ、注文してた弁当。『辛そうで辛くない少し辛いあつやつぱすげー辛いだめ! 後からきた! これだめ死ぬ!だめだな、こんなラー油は出来損ないだ、本物のラー油じやない、一週間、一週間あれば究極のラー油を用意して差し上げますよ、な食べられるラー油を使つた特選牛カルビ重弁当』だっけ? そろそろどんなもんか食べたいんじゃが」
なんかまた名前変わってきてるぞ……

「はい、こちらに……」傍らのキャリアーを開け、中身を確認。この際商品名なんかどうでもいい。「受け取りに判子もらえますか?」

「ああ、判子な、ばーさん判子どいじやつたかのう。四、五十年前にタンスに閉まつたと思うんじやが……兄ちゃん、やつぱサインでもええか?」

「四、五十年か……やはり竜と人では時間感覚が違うな。

「別にサインでも構いませんよ」

「おお、スマンのう 太い爪先でボールペンを握る老竜。さらさらと俺が持つ受け取り書にサインを書いていく。

器用だなあ、つつか達筆過ぎて読めねえ……

「あ、お姫さん。」うちの食玩のはづは……」

キャリアー奥の食玩を引つ張り出す。やはりこれも竜、多分奥さん辺りの趣味なのか？

「おお、忘れとつた。これはワシらじやなくて知り合いで娘の頼まれもんでな、注文する時に一緒に取つたんじやよ」

あれ？ 竜夫妻の物じやないのか？

「小さい頃から知つてる娘でしてねえ。私達の所に大きくなつた今でも遊びに来てくれる優しい子なんですよ。
それに最近お仕事関係でとても偉くなつたんですつて。なんだか私達も誇らしいわあ」

知り合いで娘さんはどうやらこの夫妻にとって孫娘のよつなものがらしい。とても性格のいい人なんだろうか。

「じゃあ俺達もそろお暇を……おい！ ダイム、行くぞ！」

「あら、もうすぐその娘がくるのよ。良かつたらもうちょっとくつしていかないかしら？」

「わうじやなあ、もう少し茶でも飲んでいかんか？」

「あー、いやこの後も仕事があるもんで……」

チーンと不意にベルがなる。訝しげに振り向くと部屋の隅にある

人間サイズの扉、その上部のハンドルが焦滅していた。

「あら、ゼルフィアちゃんが来たみたいね」

奥さんが巨体を揺らして扉へ近づいていく。

「……あの扉は何ですか？」

「ああ、あれは例の知り合いがつけてくれた魔王城直通の非常通路ハレベーターじゃ。ゼルフィア、知り合いの娘が来るのに使ってんじゃよ」

偉くなつたとは聞いたが、ずいぶん権限があるんだな。

「先輩、ゼルフィアって名前つてひょつとして……」

いつの間にか近くに来ていたダイムが呟く。なんだ？　聞き覚えのある名前なのか？

ゆつくりと開く扉、中にはいる人影が現れる。長身かつ整ったプロポーション、三つ編みにまとめた紫の長髪、厚めのメガネ、上下は安っぽい水色のジャージだった。

そして何よりも最大の特徴、赤くなつた目元と鼻をする声。つまり、半泣き。

「ば、ばあちゅ……」

「あら、ゼルフィアちゃんどうしたの？　そんなに泣いてー。」

泣きの入った第一声に、奥さんが慌てる。

「なんぢやあ！？　ゼルフィアどうしたんぢやあ？　誰かいじめら

れたなんか？」

駆け寄つていいく旦那竜。といつか、あの入つて……

「なあ、ダイムあれつて……なんか見覚えある人なんだが」

「……ええ、多分先輩の思つた通りです」

「まあちやん、またアリスに本捨てられた……」

「まあ！　またなの！　小さい頃はあんなにゼルフィアちゃんとアリスちゃんは仲良かつたのに……」

「つづむ、ゼルフィア、ちょっとアリス呼んでいい。じいちゃんが説教してやる！」

捨てられた本……多分、B-Lかなあ……

「うん、大丈夫だから、本は最悪もう一回買い直せば……げつ！」

娘さんの視線がこちらを見て固定。表情に現れる動搖。いわゆる『見られたくないものを見られた表情』

「な、なんでお前らここに！　……あ、いやえーと私はアリス、アリスだ！　魔王じゃないぞ！」

とつさに偽名を名乗るゼルフィア　　『どうか魔王さん。』

『アリスってたしか側近の名前だよな？　いいのかそっち名乗つて？　ひょっとして魔王さんこんなのはこの夫妻が甘やかしてるからなのか？』

「あのー、もう正体モロバレですから、魔王さん。第一、そのジャージの格好で深夜におでんやらアイスやら買いに来てたじやないですか」

深夜勤務での格好はよく見ている。まさかバレてないと思つていたとは。

「なつ！？ 知つてたのか！ バレてないと思つてたのに…」

魔王城地下ダンジョンをジャージでウロウロ出来る姉ちゃんなんぞあんたしかいねえよ。

「魔王さん、別に食玩とかわざわざダンジョンに配達しなくても、魔王城くらいなら届けますよ。といつかダンジョン潜るのはキツいんで正直配達はちょっと……」

「仕方ないだろ、世界のウサギシリーズの隠しのウォーパルバーが欲しかったんだ！ それに、あ、あれだらお前ら……」

魔王さんに、一瞬の逡巡が見える。しかし意を決したように喋りだした。

「良い年した大人、それも魔王がこういうおもちゃを買つと……影でこそこそ『大人気ない』とか『ダメ大人』とか『ミーハー』とか色々言うんだろ？ アリストのやつが言つてたぞ」

なんかそうとう不信に思われてんのかな俺達。あの店長が怪しいのはしょうがないけど。

「あのね、魔王さん。俺達は一応客商売なんすよ、少なくとも店の商品をどんな人が買おうと、それを影で笑つたりはしませんよ。俺だつて影でそんなことをする店には行きたくないませんからね。うちの店長はそういうのは厳しいタイプですし」

「実際、店長はチャランポランに見えるが、接客態度には厳しい。裏で客を笑う事は絶対してはいけないとまず最初に言われた。」

「先輩の言う通りですよ。それにああいう食玩はむしろ大人が集めるものですから、別に魔王さんが集めても別に変じゃありません。僕だつて生物図鑑シリーズ集めてますし」

抗弁に加わるダイム。そういうことも色々集めてたな。

「う、うむ、そ、そつか、別に変なことじやないのか……な」

魔王さんの強張った表情が徐々に溶ける。どうやら思い込みとかつてしまひつたようだ。

「あ、じゃあ食玩の箱振つて中身探つたり、計り持ち込んで重さ計つたりしてもいいよね！」

「それはダメです」

魔王さん、それは営業妨害だ。

「……この人ほんとにあの魔王なんですか？」

口を挟むメリル。猜疑の視線を魔王さんに向ける。無理もない、魔王といえば魔族最強、冒険者最大の障壁。このひとつみても家の近

くに買い物にきた姉ちゃんではそりは思えないだろ？

「あ、ジムさんそれって『世界のウサギシリーズ』！ それ私も集めてるんですよ」

俺の手に持つ食玩に『氣づく』。どうやらメリルも魔王さんと趣味が同じらしい。

「お、なんだお前も私と同じやつを集めてるのか？」

少し嬉しそうな反応を見せる魔王さん。やはり同じ趣味の人間が近くにいないのだろうか。

「え、魔王もこのシリーズ集めてるんですか？」

「あ、ああ！ 良かつたらダブったやつ交換しない……」

「うわあ、魔王がウサギのフイギュア集めてるとかイメージ崩壊もいいところですね！ 自分のキャラクターわかってるんですか！？ ギャップ萌え狙いとか今時寒いだけですって」

「え、いやあのちゅう……」

困惑の声を上げる魔王さん、ショックで一歩足が引く。オイ、メリルもう止めないと！

「大体魔王がそんなの集めてどうするんですか？ 寝る前に名前とか付けて遊ぶんですか？ 成人でそれは有り得ないですって」

「う、うう、」

魔王さんの足が更に引く。図星か？ ひょっとして図星だったのか？ おい、メリル空気読め、頬むから空気読め！ メリイイイルツツー！

「うわあああああああああんつ！…」

身を翻す魔王さん、そのまま猛スピードで扉へ走っていく。逃げる氣らしい、かなりショックだったのか！

「魔王がウサギ好きで悪いかあああ……あだつ！」

あ、コケた。しかも結構派手に。

「ゼルフィアちゃん！ どうしたの！」

「なんぢや、ゼルフィア、派手に転んだの！」

魔王さんに夫妻が駆け寄る。やっぱ過保護だなあ。

「うう、イジメるよ……魔術士がいじめてくれるよ……」

「うわあ、魔王さん結構打たれ弱いんだなあ。

「やった！ やりました！ ついに念願の魔王を倒したよジムさん！」

ガツツポーズを決めるメリル。……この娘は実力とか攻撃力とかでは計れない破壊力を持っている……つ！
メリル、恐ろしい娘！

「あのー先輩、そろそろ戻らないと店長に怒られる感じや……」

「ん、そうだなあ」

腕時計で時刻を確認。この時間帯は……

同時刻、デッドライン魔王城店(ラスダン)

「店長ーー！ いへりレジをやつてもお客様が無くなつません！」

「ああー、リドもひよつと頑張つテー……ジム君達はいつ帰つてくるんでしょう？ 私もう限界、……」

……一番忙しい頃だな。

「ダイム……もう一杯紅茶頂いていくか？」

後日、人件費が割に合わないとの事で配達は取りやめになつた。
それから、たまに赤背広の老紳士と赤服の老淑女というダンジョンに全く場違いな夫婦が買い物に来るようになつたが、とりあえず俺は気づかないふりをして、軽く挨拶をする程度にしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5743u/>

ダンジョンコンビニ デッドライン 魔王城《ラスダン》店によこそ！

2011年10月31日03時09分発行